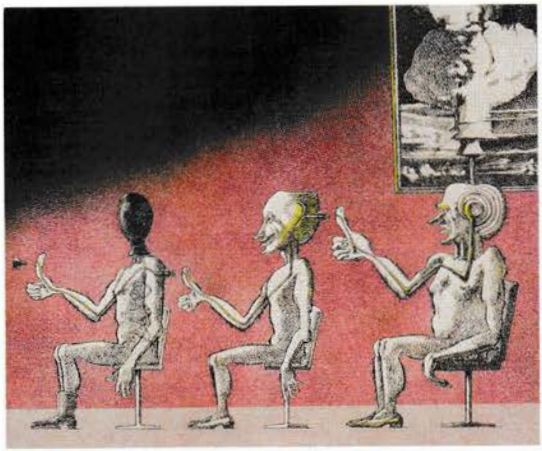
「障害」児・者と共に生きる作業所
夢屋
NPO 夢屋プラネットワークス

夢屋ブックレット Vol.2

往生岳の麓にて

～障がい者作業所から見た本と時代の風景～

宮本誠一



往生岳の麓にて

～障がい者作業所から見た本と時代の風景～

夢屋ブックレット

もくじ

【書評】

阪神大震災後の心の闇を解く〈「神の子どもたちはみな踊る」村上春樹著〉……10
荒さの中に日本文学への愛情〈「作家の値うち」福田和也著〉……11
生々しく描く「在日」の苦しみ〈「悪い噂」玄月著〉……12
不登校生のつくる理想区域〈「希望の国のエクソダス」村上　龍著〉……13
深い淵に横たわる始源の世界〈「聖耳」古井由吉著〉……14
「性」と「家族」の境界こまやかに〈「ぼくはこうして大人になる」長野まゆみ著〉……15
作者と重なる闘う主人公〈「鳥たちの舞うとき」高木仁三郎著〉……16
切ない〈近代〉への問い〈「石牟礼道子対談集　魂の言葉を紡ぐ」石牟礼道子著〉……17
宇宙と結びつく地球の水〈「水の自然誌」E・C・ピルー著　古草秀子訳〉……18
「育児」が活動家を変えた〈「りんごの木の下であなたを産もうと決めた」重信房子著〉……19
苦悶する作家の存在うたう〈「日本文学盛衰史」高橋源一郎著〉……20
自己を相対化する視線〈「心とは何か」心的現象論入門　吉本隆明著〉……21
ささやかな〝生〟の充足描く〈「無事の日」佐伯一麦著〉……22

「基地共存」の演出に憤怒〈「沖縄／草の声・根の意志」目取真　俊著〉……23
行動しながら自己を発見〈「ミスター・ヴァーティゴ」ポール・オースター著、柴田元幸訳〉……24
「宗教とは何か」分かりやすく説く〈「梅原猛の授業　仏教」梅原　猛著〉……25
当事者の立場から読み解く〈「日本文学のなかの障害者像　近・現代編」花田春兆編著〉……26
狭義超えより広い世界へ〈「緑の資本論」中沢新一著〉……27
200年前の実測日本地図〈「伊能図」日本国際地図学会・伊能忠敬研究会監修、清水靖夫ほか編著〉……28
〝不合理な戦犯〟が残す歴史〈「罪」毎日新聞東京本社社会部編〉……29
死の淵で記した執念の一冊〈「懐かしい日々の想い」多田富雄著〉……30
神経の「記憶」で読み解く〈「心の起源」木下清一郎著〉……31
深い悲しみ映す「事実」の書〈「順ちゃんの戦場」新美虚炎著〉……32
民衆の側から歴史に光〈「赤いシカの伝説」さねとうあきら著〉……33
世界的視野の必要性問う〈「第二次大戦とは何だったのか？」福田和也著〉……34
米の矛盾を日常的視点で〈「アメリカ病」矢部　武著〉……35
身体の性差に視点あて洞察〈「オトコの進化論」山極寿一著〉……36
闇の本質を模索する鼎談〈「親鸞と暗闇をやぶる力」上田紀行・高史明・芹沢俊介著〉……37
「希望の病」へ再生の道探る〈「新しいうつ病論」高岡　健著〉……38
他者の存在消す新たな課題〈「動物化する世界の中で」東　浩紀・笠井　潔著〉……39
「皮相上滑り」の開化を告発〈「江戸・東京の被差別部落の歴史」浦本誉至史著〉……40
生き方再考するヒント凝縮〈「一回性の人生」梁　石日著〉……41

自伝を超える優れた文学性〈「在日」姜　尚中著〉……42
つくり手の思い伝える〈「パンをめぐる旅」スーザン・セリグソン著、市川恵里訳〉……43
司法界の影見渡せる記録〈「免田栄　獄中ノート」免田　栄著〉……44
生みの喜びと苦しみ告白〈「評論家入門」小谷野敦著〉……45
生態系に縛られないセックス〈「ヒトはなぜするのか」ナイルズ・エルドリッジ著、野中香方子訳〉……46
客観的な「被差別」への視線〈「はじめての部落問題」角岡伸彦著〉……47
旧樺太残留日本人妻の「戦い」〈「置き去り」吉武輝子著〉……48
微かな響きに耳をすませる〈「書評のおしごと」橋爪大三郎著〉……49
一局に集中させない思考〈「身体から革命を起こす」甲野善紀、田中　聡著〉……50
「老い」テーマに時代批評も〈「生涯現役」吉本隆明著〉……51
東アジアは「世界の縮図」〈「環境共同体としての日中韓」寺西俊一監修、東アジア環境情報発伝所編〉……52
大人に洗脳される子どもの「白昼夢」〈「ゆきこんこん物語」さねとうあきら作、井上洋介・絵〉……53
人生顧み運動の意味問う〈「思想としての全共闘世代」小阪修平著〉……54
政策、地方からとらえ直す〈「地域再生の条件」本間義人著〉……55
深い畏敬にじむ作家論〈「太宰と井伏　ふたつの戦後」加藤典洋著〉……56
「人間本来」の営み紹介〈「農のある人生」瀧井宏臣著〉……57
「歌」と時代背景に自分史も〈「ぼくの歌・みんなの歌」森　達也著〉……58
防衛策の必要性増し復刊〈「ストレス『善玉』論」中沢正夫著〉……59
過酷な塀の中の「生」淡々と〈「故郷は近くにて」関　敬著〉……60

言葉で乗り越える差別の苦悩〈「私の生まれた日」井上ハツミ著〉……61
鼎談に映る「日本人」とは何か〈「教育をめぐる虚構と真実」神保哲生ら著〉……62
「負け組」にエール送る人生論〈「陥没する世界のなかでの『しあわせ』論」西部　邁著〉……63
「労働」瓦解の実態　赤裸々に告発〈「派遣のウラの真実」渡辺雅紀著〉……64
「裁く」ことの意味　切実に問う〈「私たちが死刑評決しました。」フランク・スワートローほか著、上田勢子訳〉……65
平和革命へ政治参画意識を〈「民主党　波瀾の航海」鎌田　慧著〉……66
新解釈で歴史の常識にメス〈「ユダヤ人の起源」シュロモー・サンド著、高橋武智・佐々木康之・木村高子訳〉……67
真実を求める人間の姿、歴史の欺瞞解き明かす〈「戦争裁判」の著者　本田タネさんと会う〉……68
肉声が生む核心との出会い〈「浜田知明展―版画と彫刻による人間の探究」に寄せて〉……70

【きょうの発言】

「する」自由と「しない」自由……74
「個」のない場所のいじめ……76
つくり手と受け手……78
「男の自立、女の出発」……80
「言葉の壁」を超えて……82
夢屋の達人たち……84
絶望の炎と希望の火……75
四体満足でも「不満足」？……77
「誤爆」と「空爆」の隙間……79
ゆるやかな「枠」の解体から……81
若者の闇と光……83
生きていく者たちへ……85
地方の小さな作業所から発信するということ……86

宮本誠一

往生岳の麓にて

～障がい者作業所から見た本と時代の風景～

書評

熊本日日新聞〈2000年4月16日～2010年4月25日〉

阪神大震災後の心の闇を解く

村上春樹には以下の転換点があったと思う。一つは『羊をめぐる冒険』、次は『ノルウェイの森』、そして『アンダーグラウンド』である。この、当初『地震のあとで』と題され文芸誌に連載された五編と書き下ろし一編からなる作品集は、もちろん三段階目に属す。

登場人物は様々である。連れ添った妻に突然、逃げられた夫。漂流してきた材木を燃やし焚き火をする男と密かに共感する女。神の子の烙印を押されながらも父を探す男。遠くタイの地で、かつて裏切った男が震災の瓦礫で惨たらしい死を迎えていることを望む女医師。バブル崩壊後、東京での震災を阻止するため地下のコロイド状のミミズと闘う巨大蛙。友人と離婚した女性を実は数十年思いつづけPTSD的症状のその娘と三人で暮らしながら、生きる希望を持つ男。どれにも共通するのは阪神大震災後の無意識に入り込んだ、自我に対する色濃く遊離した影であり、人々の心理の奥底にはそれが空虚感となって漂っている。

震災、そして地下鉄サリン事件以降、心の闇を解くためにも制度化されていない手垢にまみれぬ言葉を使い、新しい物語を紡ぐ必要性があると明言した作者が、果たしてどのような作品世界を形成していくのか読者は興味深く見ていたはずだ。ディタッチメントからコミットメントへ。「あちら側」と「こちら側」。ここでは光と闇、心と身体、夢と現実、自己と非自己、奇数と偶数といった両者間の『境界』と『通過』をテーマにリアリティーを皮膚感覚で取り戻すことはもちろんのこと、信仰や人間愛そのものさえも肉感性としてとらえ直そうとする姿勢が垣間見られる。

だが、一つ疑問というか不安感は残る。果たして一人の作家が自らの独自の〈物語〉（＝深い井戸）を出て我々の共有する現実社会という〈物語〉へ文体ともども接近するとき、「こちら側」の住人としてはそのことをどう受けとめ咀嚼（そしゃく）すべきなのか。いずれにせよ、第四期への確かな胎動が感じられる作品集であることはまちがいない。

「神の子どもたちはみな踊る」

*村上春樹 著

新潮社 1,300円

＊むらかみ・はるき　1949年京都府生まれ。ジャズ喫茶の経営を経て『風の歌を聴け』でデビュー。

荒さの中に日本文学への愛情

「作家の値うち」

*福田和也 著

飛鳥新社 1,300円

作家五十人ずつ、計百人の最新作をふくむ主要作品五百七十四点を百点満点で採点、簡潔な作品紹介と作家論を付したブック・ガイドである。

著者は、一九六〇年生まれの文学から政治まで幅広くこなす評論家だ。多かれ少なかれ偏差値教育を生きた一人で、自らがくぐってきた点数評価法によって、今度はある種ゆるみきった社会（文壇）に対し、反対に明快な審判を試みた一品とも言える。だからというわけではないが、やや小型のＢ６サイズに、現代作家と作品を小気味よく並列させ、さながら試験直前の暗記本のようである。少々ヤケ気味であっても、だがそこに若干の自虐的快楽を見いだしながら蛍光ペンを走らせ、徹夜していたときのことを思い出してしまった。

戦後民主主義への、著者自身の不信の姿勢もあってか、中身は、個々の作家や編集者、読者や出版界の、在り方や認識にまでさかのぼっていく。読んでいて、けっしてこれは東京圏の文壇や作家の世界だけの問題ではない、と考えさせられてしまうのは、勢いの成せる技だろうか。その説得力の源は、おそらく、少々荒さは目立つものの著者の一貫した評価基準と切れ味のいい文体にあるといってまちがいない。

対象からできるだけ虚像をとりはらい、作品と文体に意識的でない、または惑溺している作者には辛辣（しんらつ）な刃を飛ばしまくる。そして常に緊張感を持続し、新しい作品世界へ挑戦しながら拡大深化させる者には、ジャンルを問わず賛辞を惜しまない。おべんちゃらがないかわりに、けっして冷ややかな傍観者的態度もなく、そこには著者の隠しようのない日本文学への愛情が感じとれるのだ。

その意味でこの書は、いずれ著者に跳ね返ってくることを承知で、批評家としての深い自覚と責任の上に記されたものといっていいだろう。

けっきょく、著者の叫んでいることは一つなのだ。現在の〈畏怖すべき作家のあまりの長期にわたる不在〉その事実である。

*ふくだ・かずや　1960年東京都生まれ。文芸評論家。慶應義塾大学環境情報学部教授。

生々しく描く「在日」の苦しみ

ベールに包まれていた指導者が、長い歳月を経て分断された隣国からの訪問者（大統領）を微笑で出迎えたり、ある文学賞を厳正に審査した男が、公然と今は死語となっていた母国の蔑視用語まで持ち出し民衆へ言い放つ風景を「在日」の人ら、中でも作家たちはどのような目で見、受けとめているのだろうか。

作者は昨年、「在日」の一世と二世の感覚の隔たりを炙り出す作品で芥川賞を受賞した。

民族の底に流れる癒しがたい傷、そして〈同化〉していく中で誇りや怒りが否応なく奪い取られ無感覚となっていく姿がそこには表現されていた。これはそれに続く二本目の著書で表題作と『宵闇』の二作品からなっている。

『悪い噂』には「ホネエ＝骨」と呼ばれる男が出てくる。〈骨〉はそのあまりの幼児期の厳しい生活ゆえ、同じ「在日」の仲間たちからも疎んじられてきた。常によからぬ噂がつきまとい、それを傷とともに背負い生きているのだ。不衛生により菌が入り腫れ上がった性器の亀頭を切断された姿は象徴的だ。作品はその甥である涼一という少年の目を通し、生々しいまでの実相をうつしだす。そこには吹き曝しの性と暴力があり、祖国の喪失と自らの人生を自分で選び取ることのできなかった者のもつ苦しみがある。だからこそ読者は、改めて次の問いと向き合わされる。

〈骨〉とは一体何なのか。

おそらく、この言葉にこそ意味が隠されている。異国の生活の舞台で「ホネエ」と軽っぽいアクセントをつけ呼ばれ、作者があくまで〈骨〉という名にこだわったその音の隙間の奥底に、答えは存在している。

「宵闇」は〈祭り〉という非日常の空間を背景に、一人の女性の封印された過去の性体験が甦ってくる。もう一方の女性は実は彼女の若年のころの分身の役目も担っており、両者の深層意識をかり、外からの抑圧と内からの抵抗を巧妙に描いている。

話体の滑らかな表現が作品の崩れを救い、それがまた不気味な色彩と臭気をかもしだしている作品である。

「悪い噂」

*玄 月 著

文芸春秋 1,143円

*げんげつ　1965年大阪府生まれ。様々な職業を経た後、大阪文学学校にて執筆活動始める。

不登校生のつくる理想区域

村上龍は映像的イメージを瞬発的に喚起させる作家である。本作はそんな彼には珍しくどちらかと言えば、イメージではなく、作家本人のイデア（理念）を論理的に描いている。あとがきに執筆動機について、四年前インターネットの掲示板で「今すぐできる教育改革は？」という質問を出したところ、用意した「数十万を超える集団不登校が起こること」という正解がなく、しかも多くの読者からその考えを受け入れてもらえなかったため、これをモチーフに小説を書くことにしたと述べている。美談にもとれるし、思い込みの強い話でもある。だが使命感にこだわりつづけ、読者を魅了してきた彼らしい行為とも言える。

物語は二〇〇一年、パキスタンとアフガニスタンの国境で、部族の一員として銃を下げ行動する十六歳の日本人少年が、テレビ画面に登場するところから始まる。「日本が恋しくないか」というアメリカの記者に「あの国には何もない。もはや死んだ国だ」と超然と言い放つその姿は多くの同世代の若者の支持を受け、そこから刺激を受けた中学の不登校生たちはネット・ビジネスを開始する。彼らにももちろん中心的役割の人物はいて、最終的に北海道の野幌に、イクスという地域通貨と風力発電をもつ経済的にも独立した理想区域をつくっていく。

しかし読んでいて発想の根底に疑問を持つ。これまでにない新しい集団の登場を問いながら、これではやはり実力と指導性を身に付けたリーダーの存在が前提ではないか。作者が執拗に「組織」や「メンバー」という言葉を否定し、〝ネットワーク〟の自由さと個別性を強調してみても、リーダーやカリスマが質と形を変え現れてきたとしか思えない。

これをもし〈ファンタジー〉として読めというのならできないこともないのだが、若干平板な感は否めない。自己や制度を根本から問わないかぎり、組織や集団の新たな形は見えてこない。

中心なき変動をどう描くかにこそ、重要なテーマはあると思う。

「希望の国のエクソダス」

*村上　龍 著

文芸春秋 1,571円

＊むからみ・りゅう　1952年長崎県生まれ。小説家、映画監督。『限りなく透明に近いブルー』でデビュー。

深い淵に横たわる始源の世界

古井由吉の作品を開くたびに、生半可な知識や倫理の無能さを思い知らされる。通常の《読む》行為ははねのけられ、生理や感覚の波にどれだけじっと向きあえるかがすべてのような気がしてくる。この十二の短編からなる作品集はそんな彼の特質がより瑞々しく息づいている。それは網膜の手術と肉親の死、そして還暦を越えた自身の年齢から来る「いずれにせよぎりぎりの境に入るその前に、おそらく秒刻みになる直前」（『火の手』より）という状況からくるものなのかもしれない。

「窮地に追いこまれた人間には、世間の休息そのものが、我身の破滅をふくんで時間がしばしば停滞しているようで、おそろしいのかもしれない」（『朝の客』より）。私たちの何気ない日常、そこにはとらえ方を異にすれば固唾をのむほどの深い淵が横たわっている。

「最期の息はすべて唄となって残るものなのか。生きる者にときおり取り憑く、あたりに舞い踊りおもむろに寄り集まるような恍惚はすべて、死者たちの息のなごりに触れてか」（『知らぬ唄』より）。目と耳に入るものを中心に、その極限で日常は一変し、呼吸音や幻覚、記憶が錯綜し、不気味な連結がなされる。のどかな光景は薄闇となり、饒舌な喧騒は死者たちの気配に満ちた沈黙へ姿をかえていく。

「風景が日々に変わりもなく映るのは、人の心身が日々にほんのわずかながら改まる、そのきわめて微小な更新によることではないか」（『晴れた日』より）。無意識に日頃、受容している関係は反転し、認知されている外界が実は内部の不安定をなだめ、均衡を保たせていることが見えてくる。ではそれさえゆらぎ、安穏とできなくなった先には何があるのか。「もはや隠すも露われるもない。偽りも真実もない。内も外もない。我身のものではないかのように突き上げる」（『聖耳』より）

静けさと、まるで子宮の中へでもかえったような始源の世界が待っているだけである。作家は深遠な領域へ、また一人、踏み込んだ。

「聖耳」

*古井由吉 著

講談社 2,200円

*ふるい・よしきち　1937年東京都生まれ。小説家、ドイツ文学者。「内向の世代」の代表的作家。

「性」と「家族」の境界こまやかに

印貝一は、十ちがいの双子の姉兄から自分を女だと思いこまされて育てられてきた。物語は主人公の一人称の語りの中で、彼の学校へある日、姉の恋人の弟、七月が転入してくるところから急展開してくる。一と七月は深層でひきあいながらも、表ではつよく反発する存在である。そこに一の性愛傾向を知る幼なじみの健、ひそかに一が好意を抱く令哉、一に恋をする女生徒、薫とが交錯しあう。

一はすでに自分が印貝家の養子であることを知っていて、その秘密を共有する従兄とは深い関係にある。

この作品はそんな一の理知的かつ冷静な視点からこの「性」と「家族」の境界をこまやかに、そして均等に描きとっていく。もちろん十五歳の精神がこれに持ちこたえ続けられるはずもなく、やがて無残にもやってくる自己破綻を作者は忌避したりしない。むしろここに思春期に対しこれまで言い古されてきた、大人への準備としての役割ではなく、〝全人生における人間性の回復〟のきっかけがあると言おうとしているようである。

「思い出に価値を認められる人間は、たぶん幸福な生涯を過ごすだろう。自分の存在を疑わないということだから」。一のこの言葉は痛烈だ。題名の『なる』は彼の現在という地点からの意思表示でもある。

だがほとんどの中学生たちは多かれ少なかれ絶望を背負いながら、それぞれの立場でまた大人へ向けての模倣を繰り返しだす。一に生きる根拠は見出せるのか。彼の不確かな「性」の意識像は、ほんとうに姉兄の力だけによるものなのか。

謎が解けていくラストのくだりは、哀愁と切なさに満ちている。真実を知った一が何を求めるかも、ここでは伏したい。生と死、希望と絶望は紙一重であり、憎悪する対象が一瞬にして愛すべき者へ変わることもある。光は向こうからやってくるのだ。

最後に、この作品が奇抜な発想ながら風俗に偏らなかったのは、デビュー以来色褪せない作者の硬質な文体へのこだわりにあることをつけ加えておく。

「ぼくはこうして大人になる」

*長野まゆみ 著

大和書房 1,200円

*ながの・まゆみ　1959年東京都生まれ。小説家。『少年アリス』でデビュー。

作者と重なる闘う主人公

本書は昨年十月に作者が永眠する二カ月前、抗ガン剤も効かなくなった体で集中的に口述された。脱原子力社会の実現をめざし民間の情報施設を立ち上げ、自ら〈市民科学者〉として専門家の閉鎖的な壁をやぶることに奔走した、そんな彼が、死の宣告を前に最後に選びとった表現手段、それがこの〝小説〟である。

舞台は、日本全国で展開されるどの大型の公共事業にも共通するであろう豊かな自然をもった『G県天楽谷』。ダム工事が着工されているその谷で、トレーラーやクレーン、掘削機などが崖から落ちるという不審な事故があいつぎ、ついに人命まで失われる結果となる。その犯人としてカラスの群れの襲撃が明らかとなり、その教唆、訓練役の首謀者として谷の長が逮捕・起訴される。そこへ作者を彷彿させる市民活動家で、同じくガンの告知を受け余命いくばくもない草野公平があらわれるのだ。

彼は鳥と会話する女性摩耶にしだいにひかれ、鳥たちのリーダーであり威厳に満ちた大トンビ、アオラとともに何十万を超す鳥たちの舞いをコンサートの中で成功させ、世界に谷の豊かさを訴える。裁判や生態系の調査報告も進み、事件の真相が解明されるにつれ、関連するいくつかの事故が政争と利権に絡み意図的に仕組まれていたことが見えてくる。

「最後の晩餐」はよく聞く。だが人が「最後の表現」をするとき、何をどのような形で残すのか。連れの女性の「あとがき」に、小説を書くことは作者の長年の夢であり、リタイヤした後の希望であったと記されている。

夢と希望の結晶のこの作品が、命と引きかえになるだろうダム問題へ取り組む草野の姿と重なっていく。

作中で突き当たる「いつ死ぬかという問いの次元を超えた何ものか」は、宮沢賢治を愛読した作者らしい、自分自身の魂と向き合うことでしか開けない、より普遍的な場所からのメッセージを含んでいる。

高木仁三郎は確かに、賢治の残した、天に上り燃え尽きた鳥〝よだかの星〟になったのだと思う。

「鳥たちの舞うとき」

*高木仁三郎 著

工作舎 1,680円

*たかぎ・じんざぶろう　1936年群馬県生まれ。物理学者。原子力資料情報室を設立、代表を務めた。

切ない〈近代〉への問い

一人の作家に近づくとき、直接その主著から始めるより、対談や講演集の方が入りやすい場合がある。とくに時代性と情報社会の中、ジャーナリスティックな面が強調されるあまり、作品の輪郭が見えにくくなったりする。そんなとき、作者の意志とは無関係に遠まわりの経路を読者は選択するのかもしれない。二十数年前の学生時、『苦海浄土』を読んで以来、どこか意識的に避けてきたこの作家の言葉に久しぶりに耳を傾けながら、そういったことをふと考えていた。

対談の年代は、ちょうどその空白を埋めるべく、七十年代後半から九十年代にかけてである。相手も雑誌の編集者から作家、フェミニズムの運動家、看護師、多国を放浪してきた翻訳家、染色家、ドキュメンタリーの映画監督らと多岐に及んでいる。

根底に流れるものは、切なく苦しいまでの〈近代〉への問いであり、今後人類がいきつき、地球上にもたらそうとしているものは何か、ということだ。

「人間は滅びの方へ行ってしまうかも知れないけれど、水俣の患者さん達を見ていると、何か人類に残せる言葉というのがあるんじゃないか、という気がしています。あれほどの絶対受難にあわれた人たちが人間を見捨てないで、これから人を見つけたいとおっしゃるんですものね。人間がいるにちがいないって、そういう人たちと魂を通じ合わせたいとおっしゃっている」

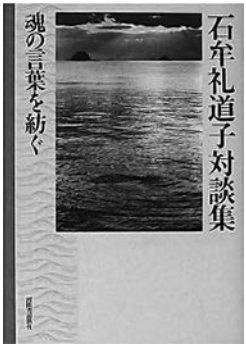
この対談集を読んでいて、あらためて彼女の『声なき声』をうつしとる巫女（みこ）的資質と母性の原風景を感じさせられた。しかも自らの表現と美意識に対しては、そこであまり使命感を言いたてず、論理や倫理でも見たくないとし、海原にも似た内面を透視しつつ、一見、聞き書きのふりをしながら実は、現代の『口説き』を法論的に極めて自覚的な作家の一面である。

一人ひとりとの〝生きた言語〟のやりとりは、〈近代〉というベールの向こうにある石牟礼道子という稀有な作家の実像を、不知火の火影のように浮かび上がらせている。

こころみていると、その創作上の意図を述べている。方

「石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ」

*石牟礼道子 著



河出書房新社 3,200円

＊いしむれ・みちこ　1927年熊本県天草生まれ。作家。著書に『苦海浄土わが水俣病』など。

宇宙と結びつく地球の水

「水の自然誌」

*E. C. ピルー 著
古草秀子 訳

河出書房新社 2,400円

中学のとき、地球儀の制作というのがあった。球体に細長い流線形の図面を幾枚も貼っていくとそこに海や陸地が誕生する。それを最後に地軸の台にはめこみ、ぐるぐる回す。小さく描かれた地形はめまぐるしく変化はするが、止めるとその一つ一つはもとのままだ。おまけに丁寧に全部に名前がついているため、最初から移動もせず、そこにあったものに人間が後で苦労して整理してやったように思える。なんだかチャップリンの映画のようだが、今ふり返るとたしかにそんな心境だった。

そもそもその場所に川が流れ、湖や海があるとはどういうことなのか。カナダ在住の元大学教授でナチュラリストであるこの本の著者は、常に地球が宇宙空間にある惑星であることを忘れていない。たとえばダムが支えている膨大な水の重量は地球の自転に影響を及ぼしているそうだ。自然にあった場所から主に自転軸に近い中緯度へと移動させられた大量の水により自転速度は速められ、この半世紀に一日の長さは〇・〇〇〇一秒縮まった。しかも貯水池が地軸に対照的に位置していないため北極と南極がずれ、六〇センチ動いてしまったという。地球の南北での経済格差と無計画な開発が、皮肉な結果をまねいている。

また、意外な仮説も述べられている。それによれば、これまで太陽系の外から重さ二十トンから四十トンのたくさんの「雪玉＝スノーボール＝（小彗星）」が数秒ごとに地球の重量圏内へ入ってきていて、これがこのまま数億年つづけば、一万年ごとに三兆トンの水を得るという。つまり、それだけの恵みある水が地球上では汚染の危機に曝され、不足していることになる。

読み進むにしたがい、あらためて人間の愚かさに気づく。それは図面を貼ってから台座に置き、球体を回していた行為に似ている。本当は地軸を回る地球がまずそこにあり、太陽を公転しながら海も湖も、そして地下水も、今ある場所に必然的に形成されていったのだ。水は地球上の循環物だけでなく、宇宙と結びついた生命体そのものである。著者はそのことをわかりやすい科学の言葉で説明している。

*E. C. Pielou　1924年生まれ。カナダブリティッシュ・コロンビア在住の科学者、ナチュラリスト。

「育児」が活動家を変えた

黒髪をストレートにとかし、どこか物うげで、知的な切れ長の眼ざしを向けるモノクロ写真。七〇年代、中東関係で日本人が関与した事件のとき、よくマスコミに登場したその顔は、学生運動の女性闘士を象徴するに充分だった。ところが、パレスチナ解放人民戦線とともに武装闘争を行った日本赤軍の最高指導者である彼女は、昨年末、突然大阪で逮捕される。髪を切り、両手でガッツポーズをとりながらテレビ画面に登場した結末に戸惑った人も少なくなかったはずだ。これはそんな一人の活動家が、アラブの地でパレスチナ戦士との間にできた二十七歳になる娘の日本国籍取得のため、警視庁留置場で書きつづけた法務局宛の上申書であり、同時に彼女自身の生い立ちと考えを語るエッセーにもなっている。

「共生には、あるがままの姿で出会うという、正直な出会いが必要です。革命組織とか、解放運動といっても、所詮（しょせん）、人間と人間の関係が基本です」

連合赤軍の幹部など、かつての左翼活動家が獄中で手記を発表することは多いが、この著にはそれらに共通する〝気負い〟といったものが感じられない。それは、「育児が私を変えた」と本人も言うように娘の存在が大きく影響している。

八歳の誕生日、自分の素性を一大決心で打ち明けたとき「三歳頃から知っていたけどいつも隠すようにしていたから知らないふりをしていただけ」と言ってのけられる。肉親も他者であり、認識を変えることはそうたやすいことではない。むしろそばにいるからこそ、彼らが指導することにこだわった大衆以上に裏返った形をとってくる場合さえある。どんな有能な理論をもってしてもだ。また湾岸戦争の直前、バグダッドで在イラクの日本人釈放を主張した裏話などもあり、あらためてわずかな情報の一部しか触れていなかったと実感させられる。

よど号ハイジャック犯の娘たちの入国も話題になっている。世紀がかわり歴史が次の世代へ移りゆく予感はするが、本著を読むと当人たちができるだけ『個人』として自らの過去を明かすことこそ求められている気がする。

「りんごの木の下で あなたを産もうと決めた」

*重信房子 著

幻冬舎 1,500円

＊しげのぶ・ふさこ　1945年東京都生まれ。新左翼活動家。元日本赤軍の最高指導者。

苦悶する作家の存在うたう

文学とはなにか。明治維新後、この日本において近代文学は、どのような人間のいとなみのうちになされてきたか。この作品は一見、多くの過去の作家と作品を批評しながら、実は作家本人もふくめ、百年という単位でその連なりをすくいとり、一編の詩的な小説世界をつくりあげようとこころみられている。

言文一致の二葉亭四迷をはじめ、石川啄木、夏目漱石といった明治の作家たちが、現代と明治という二つの時代を交錯し合う姿はたしかに、コミカルにうつる。

たとえば生活苦のあまり自虐的に娼妓のもとへ通った啄木は、伝言ダイヤルにはまり、自然主義理論を追求しようとした田山花袋はいつのまにかアダルトビデオの監督をしている。北村透谷はその根底にひそむエゴイズムをミニのスリップドレスをはいた樋口一葉に論破され、島崎藤村はジャズ喫茶や学生運動の最中、生証人として多くの作家の心情を聞きとっていく。だが、作者は自分の内風景も入れながら、時代が移りかわっても、今なお変わらず苦悶する一個の自我を持つ作家が存在することを痛切にうたいつづける。

それはこの作品の執筆途中、作者本人が実際に胃潰瘍を患い、そのままタイムスリップし明治の長与病院に連れて行かれ、そこに修善寺の大患で伏せる漱石と相部屋となることで決定的となる。

漱石の作品中、唯一『坊っちゃん』を除いて詩の面影は失われ、小説は、あくまでも日常を生きる「生」の側に属したと言う。詩に対する作者のこうした特別な思いが告げられ、病にある身では正直、あなたの小説と向き合うことはできなかったと吐露させてしまうのだ。死の危機にあっても、散文家として淡々と市中の人たちへ「生」の言葉を紡ぐしかない二人は、時代を超え、同じ枷を背負っていることがつたわってくる。

未曾有の可能と不可能をもった作品の群れ。最終章の明治の作家たちの多くの死を知らせる当時の記事の列挙は虚しくも重く胸をおおうばかりだ。近代以降、表現のための言語の獲得から始まった文学は何を得、失ってきたのか。作者は真摯にそれを問おうとしている。

日本文学盛衰史

*高橋源一郎 著

講談社 2,500円

*たかはし・げんいちろう　1951年広島県生まれ。小説家、評論家。著書に『さようなら、ギャングたち』など。

自己を相対化する視線

読後すぐに思ったことは、この講演集発行の必然がどこにあるのかということだ。

「心」は現代社会の中でたしかに大きなテーマになりつつある。その構造の解明には心理学、遺伝子学、脳をふくめた解剖医学など様々な領域から踏み込まれようとしている。この著でも三木成夫の『胎児の世界』を取り上げながら、吉本は人間個有の精神の発達史を共同体の歴史段階と対応させ、語っている。たとえば、外界に対し《受け身》の存在である乳児期は、未開の問題として原始・古代の共同体が色濃く封印され、つぎの思春期にいたるまでの過程は、古代から現在の共同体の展開が深く刻み込まれているという具合にである。講演期間は一九七五年から九二年までの幅があり、常に共同体誕生から現代、そして近未来までの原像をとらえていた吉本からすれば、ややものたりなさを感じずにはいられない。

だが、『障害者問題と心的現象論』は興味深かった。「身体、精神とはなにか」というイメージをつくる場合、他の事物への理解の仕方とただ一つ違う点がある。それは、問いを発した自分自身が、自分の身体と精神機能を使って問いを発しているということであり、自分を使って自分に問いを発しているという点である。身体や精神と自分とがどのように関係をもち、折り合いをつけるか。そのつけかたが、一人の人間が他の人間と関係するその仕方の中にあらわれるというところも頷けた。他者への《異和》を生み出すものは、そもそも自らの身体や精神に対し、自己がそのような関係づけを行っているからであり、その延長線上に他者との関係も生まれるということである。ここに、吉本ならではの自己をも相対化して見つめるまなざしがある。

最終章では、リビドーを中心とした「個」から社会との関係性を説いたフロイトと個々の無意識の底に集号的無意識を設定したユングとの相違と可能性を示す定番となっている。

出版の必然があるとすれば、吉本隆明への入門の書として、かろうじてそこに首肯せざるをえないのが、この一冊なのかもしれない。

「心とは何か」
心的現象論入門

*吉本隆明 著

弓立社 1,650円

＊よしもと・たかあき　1924年東京都生まれ。思想家、詩人、評論家。

ささやかな“生”の充足描く

「無事の日」

*佐伯一麦 著

集英社 1,600円

デビュー時から知っている同世代の作家の作品を読むとき、そこには何がしかの思い入れが働く。テーマ、作風、文体はその後どうなったか。そこから作家の今を生きる現場の息づかいと緊張、歓び等を感じとろうとする。

作者は二十五歳で文芸雑誌の新人賞を受賞し、その後、《私小説》というジャンルを正統に受け継いできた一人だ。事象を的確につかみとる眼ざしと筆力もさることながら、何よりも生きることへの真摯な態度の強烈さは新鮮なものがあった。その作者も四十を越し、離婚と再婚、宿痾の喘息と鬱病での入院、現在の連れの女性の思いがけない人身事故という境遇の中、日々の暮らしを立て直しどうにか生きている。ここには、それら一見、平穏に思える日常の底にある解決不能な現実を描くことで、むしろそこを生ききることに、事はあって事は無い（無事）世界を見ようとしているかのようだ。並列された八つの短編はその刹那を垣間見せるモノクロの記録映画を思わせ、繊細な文体で織りなす微妙な陰影の重なりは各編を追うごとに色濃さを増してくる。

高校の同級生とひさしぶりに再会し、かつての仲間の近況を語りあう場面で、「それにしても、どうにかなっちまったり死んじまった奴ばっかりだよな、消息がはっきりしているのは」。そう吐きすてる相手に、行方の知れないのは無事の証拠かもしれないと作者はあらためて思う（『汀にて』）。また、最終章の『春の枯葉』では、毎日、同じバスターミナルで、変わらぬ風情でひっそりと立つ老婆の姿が、初め、奇異にうつっていた作者は、やがて言い知れぬ安堵をもちはじめる。

「ああして待っている限りは無事なのだろうな。しかしあの隠者のような静まりの底にいて、この世に何を聞いているのだろう、この世の何が聞こえているのだろう」

焦点はここにきて俄かに輪郭を浮き上がらせる。それは我々が感受できなくなって久しい、ささやかであるがゆえ忘れてしまった〝生〟の充足なのだ。私たちはその遥か手前で多くの無事を難事とし見過ごしているとも言える。

＊さえき・かずみ　1959年宮城県生まれ。小説家。著書に『ア・ルース・ボーイ』など。

「基地共存」の演出に憤怒

社会構造の中で差別する者が被差別の側に組み込まれた者からの問題提起をうけたとき、しばしば息苦しい圧迫感に襲われる。そんなとき、問いの重さに耐え自分なりに行動に移すより、むしろ多くは「そちらの置かれている立場はわかるがこちらにも事情があり、お互い様だ」と開き直ることを選ぶことはよくあることだ。

一九九九年から二〇〇〇年にかけ沖縄の地元紙を中心に書かれたエッセイと掌編小説がおさめられたこの書の根底で問われていることはただ一つのように思える。それは今現在、沖縄の負わされている課題は「障害者」「性」「ハンセン病」差別などヤマトである我々も常に身近で見てきた問題に対し、行われてきた政治政策と根は一つ、ということである。

それは、沖縄サミットに象徴される「飴と鞭」「よき隣人政策」が物語る。サミットだけで八百十五億、北部振興策に十年で一千億という巨額の金がばらまかれ、普天間基地の『県内移設』を含めた、あたかも沖縄県人すべてが望んでいるかのような基地との『共存』の演出である。さらにマスコミ、映画、ドラマ等でヤマトンチュー（日本人）好みのウチナーンチュー（沖縄人）像がつくられ、双方ともそれによりかかった表面だけの「よき隣人」関係によって、基地問題の本質がなし崩しになっていくことに著者は憤怒する。論の端々からは〈本土―沖縄〉〈差別―被差別〉の二元論を超える新しい視座の獲得と実践こそ急務であることがひしひしと伝わってくる。

その中で来年一月に行われる名護市長選候補者を、広く外部から公募し、その能力、資質を判断した上で会員たちによって打ち出そうという、『わったー（私たち）市長を選ぼう会』の試みを興味深く読んだ。基地受け入れ拒否を貫徹できる者なら島の内外を問わず、という発想である。これはおそらく島であるゆえに、そこに固執する意識を利用してきた者にとり脅威となるはずだ。島を超え、よりしなやかな「島」であり続けようとする沖縄。そこから、いつまでも開き直り、行動を起こさぬ側たちすべてへの宣言と告発の書である。

「沖縄／草の声・根の意志」

*目取真 俊 著

世織書房 2,200円

＊めどるま・しゅん　1960年沖縄県生まれ。小説家。『水滴』でデビュー。

行動しながら自己を発見

「ミスター・ヴァーティゴ」

*ポール・オースター 著
柴田元幸 訳

新潮社 2,400円

読者は物語を前に、多くは次のどちらかをたどる。一つは、自己の体験、もしくは擬似体験をストーリーから見つけ、感情の葛藤や共有を楽しむ。もう一つは、まったく非日常的な出来事を読む中で、人生における夢や希望、絶望といったものをわかりやすく味わう。もちろん、両者とも良質なら、魂の深淵に触れることは可能である。この作品は後者に属し、ファンタジーに近く、一九九四年に書かれた。

両親もなく、暴力と酒浸りの伯父のもとで暮らす少年ウォルトは九歳のとき「今のままでいたら冬が終わる前に死んでしまう。私と一緒に来たら、空を跳べるようにしてやる」と曲芸の師匠にひろわれる。それから過酷な特訓をするため、同じく厳しい環境から連れてこられた仲間との生活と修業に入っていく。だがここでのテーマは、鍛錬克服と成功話ではない。人と人の根底からの関係回復である。

まったく見ず知らずの他人たちが、家族にはできぬ繋がりをつくりあげていく。そのため個々の感情の機微が細かく描かれ、「俺はけだもの同然、人間の形をしたゼロだった」と決めつけていた主人公が、己を信じ、変貌していく。それは、ある日、師匠の姿がないことから、過去に経験したことのない悲しみと孤独にさいなまれ、周りの世界から隔絶を感じたとき、初めて空中浮揚を成功させることにも象徴される。人間感情をとり戻すこと、それこそがもっとも曲芸に必要な条件だったのだ。

ところが、いよいよ最終目標のニューヨーク公演を直前にひかえ、空中からの着地後、異常な頭痛に襲われだす。それは十四歳（思春期）への成長が原因であり、飛翔を断念し、第二の人生を迎えねばならぬ合図でもあった。

これまで自分さがしをつづけてきた作者は、ここでは、既存そのものから存在の証を見つけるのでなく、行動しながら関係をつくり、新たな自己を発見する命題に取り組んでいる。少年が生きぬいていく場は、個が閉塞した都市の縮図だ。アメリカを代表する作家オースターが同時多発テロ後、さらにどんな物語を紡ぎだすか注目せずにはおれなくなってくる。

＊Paul Auster　1947年アメリカ生まれ。小説家、詩人。著書に『幽霊たち』など。

「宗教とは何か」分かりやすく説く

―宗教なんてものは、それぞれ自分のなかにあればいいんで、定義する必要はないと思うんです。

―宗教は自分たちの生き方を表しているものですけど、自分の宗教と違う宗教の人たちを消していこうということで国と国とが戦っているじゃないですか。

―宗教戦争といっても、キリストさんが戦争しろとはまったく望んでないんじゃないですか。信者の人らはその意志継がなあかん。

驚くなかれ、これは『人生に宗教は必要か』というテーマで、授業中、中学生同士が討論した発言の一部だ。本書は、著者が京都洛南中学をかり、宗教の授業を十二時限にわたって行い、その講義記録に加筆したものである。

今、なぜ宗教なのか。かつて戦前、日本にも『修身』があり、天皇陛下に忠義をつくし、親に孝行せよという、人にしばられた他律的な道徳が存在した。だが、マッカーサー指令により、その教育は消え、かわりに自律的道徳が教えられるはずが、それがまったくなかったと著者は嘆く。戦後こそ、個々国々の争いの原因を究明し、歴史的に蓄積された愛欲や憎悪といった対立の源を断ち、他人の信じる神や仏も大切にする多様性が求められた時代はなかったというのに。

そこで、自らの内なる力で自分自身を律する道徳教育の根幹にくるのは宗教、なかんずく仏教の四諦十二因縁、寛容と慈悲の徳が重要ということになる。

文部科学省が提唱する奉仕活動にも、奉仕より座禅や托鉢の修行をやり、忍辱（自己意志で厳しい環境に入り、人からの侮辱や軽蔑にすすんで耐える力をさし、忍耐とはちがう）の徳を養ったほうがいいと述べる（ちなみに奉仕は、本来、キリスト教の道徳である）。

いずれにせよ、これが授業という形態の中で、難解な語をできるだけ排し、仏教をわかりやすく説いた稀有の一冊であることはまちがいない。七十六歳の著者が、次世代に伝えようという意気込みが感じられる。カバー写真の菩薩像の慈愛に満ちた姿も印象的である。

「梅原猛の授業　仏教」

*梅原　猛 著

朝日新聞社 1,300円

*うめはら・たけし　1925年宮城県生まれ。哲学者。東日本大震災復興会議特別顧問。

当事者の立場から読み解く

私事になるが、ある文学賞を受賞したとき、「躁鬱病に対する偏見を助長する表現」とし、部分的に指摘されたことがある。出版社に実際に躁鬱病の方がおられ、実体験からくる丁寧な説明と提示を受けた。そのとき思い知ったのは、書く方にどんな狙いがあろうと、書かれる側に受け入れられなければ、何を表現しても無効であるということだ。それ以後、そういったテーマを扱った書はないかと気にしていたおり、この本と出会った。

執筆者二十八人は、障害者自身、もしくはかかわっている人たちだ。明治から現代まで描かれてきた文学作品の中の障害者に対する表現を評し、時代を読み解こうとしている。各五ページ程度。完成、完結を目指した研究報告書でなく、あくまで次のステップへつながる中間レポートくらいに思っていただきたいとあとがきにも述べてある。

なかでも障害者自身の書いた小説は、やはり印象的だ。片足切断した素木しづの『松葉杖をつく女』、ハンセン病患者であり、昭和初頭の隔離療養所の生活を見つめた北條民雄の『いのちの初夜』、精神障害の孤独を描いた小林美代子『髪の花』など、世間にあまり知られていない本の紹介もある。

また著名なものでは村上春樹の「ノルウェイの森」、大江健三郎『静かな生活』とつづく。だが大江の場合、『新しい人よ目ざめよ』の主人公の強い意志はなく、作者がなぜ、今さら障害を〈乗り越える〉ものとしてとらえるのか疑問に思う、と手厳しい。

圧巻は正岡子規だろう。短歌だけなら脊椎カリエスで寝たきりになった後の方が数段力強く、大きくなっているとし、布団の上から自己を主張し、自分でありつづけた子規の姿は、「人に迷惑をかけない」「何でも自分でやる」を建前にした現在の障害者教育とはかけ離れ、本来、合理性におさまるはずのない、障害者の実像と人間らしさが感じられるというのだ。ただ、枚数のためか、全体に論の薄さが惜しまれる。次はぜひ、この中からより厳選し、徹底し論じてもらえればと期待したくなってくる。

「日本文学のなかの障害者像 近・現代編」

*花田春兆 編著

明石書店 3,800円

*はなだ・しゅんちょう　1925年生まれ。脳性まひで四肢・言語に障害がある。身障者同人誌「しののめ」創刊。著書に「日本の障害者」など。

狭義超えより広い世界へ

九月十一日、あの同時多発テロを起点に、日常とのかかわり、社会を見る視点、情報のうけとり方に何か変化が起こった人は多いはずだ。著者は言う。「私はもう思考の主人ではいられなくなった。私が思考するのではなく、思考のほうが私を駆り立てて、ことばに向かわせる」と。その先には現在、多くの国が歩む資本主義の実像が浮かぶ。果たしてそこは、イスラム世界からどう映っているのか。

同じ旧約聖書を土台とする一神教の宗教だが、キリスト教では、三位一体である「父と子と聖霊」の『聖霊』の存在が大きいと言う。聖霊の、ある瞬間あらわれ一方から与えられる形に、貨幣が商品形態をとったとたん開始される剰余価値誕生の運動とが重なりやすいと指摘する。それに対し、その自己増殖や変化を一神教を危うくする魔術的本質とし非難してきたのがイスラム教だとする立場をとる。

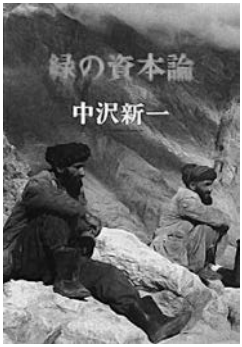
イスラム的一神教を貫く論理「タウヒード」はアラビア語で「ただ一つとする」を意味する。そこでは森羅万象、宇宙を形づくるすべてが『神』の変容となる。風のそよぎ、動物の吐息、光のふるえ、声など、この世界にあるものすべてが神の直接的表現として意味をもつのだ。よって実物よりはるかに肥大したイメージを操作し流行をつくったり、規格化した大量生産や消費へ向かう力は抑制される。

だが、両者はやがて富と貧困の圧迫から、それぞれに交易や交流、対話まで失っていく。そんな非対称な関係の危険性を早くから察知し、作品にしていたのが宮沢賢治だという着目も面白い。賢治は、決定的につながりのない世界を人間と野生動物の関係に見た。狩猟時代にはまだ行き来があった両者は、やがて、人間が圧倒的武器や家畜化という手段をもったときから支配と被支配が限定される。『狂牛病』は牛たちに、同類の牛の脳や内臓を飼料として共食いさせたことへの復讐ともとれる。

人間主義の狭義を超え、資本のメカニズムも凌駕し、より広い世界へいくことを作者はマルクスの資本論を軸に、宗教と経済をつうじて問うている。

「緑の資本論」

*中沢新一 著



集英社 1,800円

＊なかざわ・しんいち　1950年山梨県生まれ。中央大学教授、宗教学者、哲学者。「チベットのモーツァルト」でサントリー学芸賞受賞。

200年前の実測日本地図

さっそく肥後の海岸線の地図を開く。ある、ある。北部には私の生まれ育った宮内村、荒尾村、増永村、一部村、蔵満村、長洲村……。道路や鉄道のかわりに広々とした平地が広がり、その対岸には、有明海を挟んで諫早湾が口をあけている。もちろん潮受け堤防もそこにはない、測量のための朱色の線が陸地を海面から吊り上げる糸のように正確に引かれ、そこに浮かび上がった砂浜や川、山の配色の美しさに目をうばわれる。そう、これは二百年前に、実測で作製されたあの伊能図なのだ。

ご存知のように、伊能忠敬は五十歳（数え年）で隠居するまでは、下総・佐原村の名家の商人であり、米の取引ではかなりの成功をおさめた才覚ある人物だった。しかもその儲けた金は、利根川の洪水や浅間山の噴火、天明の大飢饉の際、惜しげもなく地域救済のため投じていく。今で言えばNPO、いやNGOにも匹敵する活動を行った先駆けだ。そんな彼だからこそ幕府は推挙を受け入れ、御墨つき（認可）を与えた。忠敬もそれに応え、五十四歳という年齢にもかかわらず、十七年間で全国の沿岸測量を終える偉業を達成したのである。それは、列国から外交を迫られつつあった当時、急を要する事業でもあった。

もちろんここには、原寸複製版だけがおさめられているわけではない　便利なのは、現在使われている日本地図との対比索引図が用意されていることだ。そこと照らし合わせることによって、より迅速に、深く伊能図を味わうことができる。さらに幕府や忠敬が、どのような目的と方法をもって地図をつくっていったか、豊富な写真資料、図解、そして劇画にしたてられた物語によってわかりやすく説明されている。いわば、どの角度からも網羅されている決定版と言える。

これは出版社、ならびに監修者の地図への熱意なくしてつくれなかった一冊だ。今のようなハイテクがなかった時代、自分たちの足で歩き、素朴な機材だけで、これほどの地図をつくった歴史があることを、ぜひ多くの人に知ってほしい。

「伊能図」

日本国際地図学会・伊能忠敬研究会 監修
清水靖夫 ほか 編著

武揚堂 13,143円

＊いのう・ただたか　1745年生まれ。江戸時代の商人、測量家。

“不合理な戦犯”が残す歴史

昨年三月、米国立公文書館で歴史研究家が、BC級戦犯となった旧日本軍憲兵らの遺書十五通を発見した。本書は、その遺書を遺族へとどけるまでの記者たちの取材記録である。

出征した兵士の死には戦闘で死ぬ『戦死』と『戦病死』、戦犯として処刑される『法務死』があった。十五人の憲兵には共通し、戦争犯罪人の汚名を着せられた死へのうしろめたさがあったに違いないと、ある記者は言う。

「従容トシテ喜ンデ死ニ就イテ逝キマス」

「祖国ノ歴史ニ殉ジテ立派ニ逝キマス」

だが、その後に「サレド家名ヲ恥シメテ祖先ニ申訳ナシ　私ノ墓標ハ不要デス　唯父母ノ墓ノ傍ニ桜樹ヲ植エテ私ノ墓標ニ代エテ下サイ」など、旧かな遣いの文章にはどれにも、これに似た複雑な心境が映しだされている。

さらに、裁判での上官の発言は大きく左右した。分隊が独自の判断で行うはずのない作戦を、「命令を出した覚えはない」とした師団長や、「兵士たちは、無条件降伏の報知に激怒し異常精神状態に陥り、最も悪質、凶悪なる犯罪を犯すに至った」と証言した中将もいる。

それにくらべ遺族の側は苦難に満ちていた。ある親は、県が初めて主催した戦没者慰霊祭の会場から「お宅は戦犯だから」と参列を拒否された。「戦犯」という事実が信じられず、生前の人柄を知ってもらおうと、兄と交わした手紙をまとめ、文集を発行した弟もいる。

『罪』があるとすれば、十五人は誰に、どんな罪を犯したのか。被害と加害の両者に同時になるのが戦争だが、絶対に被害者にならぬ者もいたのではないか。不合理な罪人になったとき、初めてその事実に気づく歴史しか持てぬとしたら、それこそが大きな罪である。

先日テレビで世界貿易センタービル跡に何をつくるか特集があっていた。建築家安藤忠雄は古墳のような丘陵をつくる提言をしていた。地球の一部でもあるその地面に様々な人が集う。また一方に、さらに高く雲を突きさす摩天楼を切望する人たちもいる。再び同じ『罪』が生まれるかもしれぬ営みの循環をどこかで絶たなくては、犠牲者はうかばれない。

「罪」

*毎日新聞東京本社社会部 編

河出書房新社 1,200円

＊まいにちしんぶん　1872年。『東京日日新聞』として日報社から創刊。

死の淵で記した執念の一冊

「懐かしい日々の想い」

*多田富雄 著

朝日新聞社 2,000円

免疫系をもとに「身体の自己」を世に問うた名著『免疫の意味論』を目にしたときの感銘を、今もわすれられない読者は多いはずだ。本書は、その著者が去年の五月、旅先で脳梗塞に襲われ、死の淵をさまよった際、遺稿として記した文章と、それまで書きとめておいた小文とをまとめたエッセイ集だ。本人はその後生きながらえ、再生した位置から当時の自分を別人のようになつかしく見つめている。

前半は、世界を飛び回った旅先でのことが中心をしめる。人類発祥の地アフリカで、今も太古から伝わる神話的生活をいとなむドゴン族との邂逅、タイの山岳地帯で麻薬撲滅活動を行うNGO訪問記。ヨーロッパ各地を回って感じたこと、とくに人間らしい「食」と「文化」を守る西欧の地方都市にくらべ歴史破壊に近い日本の乱開発は、目にあまると指摘する。その視野の底には、つねに日本のうわっつらだけの近代化に対する警鐘がある。

後半は、著者の本業である医療、科学、文学から『能』の舞台へとつづく。

なかでもくり返されるのは、ゲノム（生物固有のDNAのセット）の解析についてである。人間誰しもが持つヒトゲノムに関し、その普遍性だけでなく、遺伝子のわずかな相違から生まれる個別性（多様性）の両面が尊重されることが重要であり、それが人間の価値や基本的権利を守る基礎につながると訴える。

また若き日、同人誌をともに出していた江藤淳の自死について、医者の立場からその病と死をとらえた文は胸につまった。幼児期に母を亡くし、病弱だった江藤氏が、自らにやどった死への願望をおさえつける行為として文学を社会参加の手段に選んだとする一方、愛妻を失ったショックと病苦をもつ老人の鬱病のための後追い自殺という〈症例〉としての見方も失わない。その上で著者は、あえて医療の上で、生への働きかけの可能性がどこかに残っていなかったかと自問するのである。

いずれにせよ、一歩違えば『遺稿集』になっていた本書は、透徹した静けさの中に、著者の執念を感じさせる一冊に仕上がっている。

*ただ・とみお　1934年茨城県生まれ。免疫学者。「免疫の意味論」で第20回大仏次郎賞。

神経の「記憶」で読み解く

仕事がら、知的障害者といる時間が多く、心のしくみは気になっていた。それは彼らが非常にストレートに、こちらが予想していなかった心の世界を示してくれ、それをきっかけに、今までもっていた人間に対する考え方が、より深まることがたびたびあったからだ。

著者は、そんな心の原点を「生命が記憶を持ってしまったこと」におき、それを機能させる上で神経系の重要さを論じている。

生物は、かならず外界と自己との間を区切って自分の環境を不変に保とうとする（ホメオスタシス）。これは、神経系だけでなく免疫系、内分泌系ともにそなわる力だ。しかし、外界におこった変化を経験としてたくわえ、将来にそなえる能力は内分泌系にはない。さらに、経験をくみあわせ、まったく未知のものに積極的にはたらく力となると免疫系にもなく、神経系だけが残ってしまう。

神経系にはもう一つ特異な点がある。外界からの情報は、必ず記号にかえられることで受容される。そのとき使われる記号が、化学的信号や細胞反応だけではなく、電気的信号までもっている点だ。それにより他と比較にならぬ多くの情報の蓄積と素早い照合が可能となった。習いごとで、反復練習をしていると、あるとき、それまでの努力が嘘のようにやれるようになるのは、記号化がうまくいった証拠なのだ。

生命は、たまたま地球に水があったため、独自の四種類の配列（＝個性）をもった高分子が登場したことから始まる。個性はそれぞれに『個』を守ろうとせめぎあい、自身の手で自身と同一の分子をつくっていく。遺伝子はこうして形成されていくことになる。

そういえば、今は亡き、かつて出会った自閉症の青年も、こだわりやコミュニケーションの面で、実に神経系が個性豊かに形づくられていたように思える。ときとして『個』の世界を保持するため、頭につめこまれた情報を広告用紙の裏にぎっしり書き込む姿は、自らのＤＮＡの痕跡をたんたんと残しているかに見えた。本書は、そんな体験を実感をもって思い出させてくれた。

「心の起源」

*木下清一郎 著

中公新書 740円

＊きのした・せいいちろう　1925年大阪府生まれ。埼玉医科大学医学部教授、東京大学名誉教授。著書に「生命からのメッセージ」など。

深い悲しみ映す「事実」の書

人は戦争を、よく『悲惨』や『残酷』という言葉で言い表そうとする。とくに戦後生まれの人間は、想像力を働かせるあまり、自分が安易に独自な思いや判断に頼っていることに気づかない。だが、経験した者にとり、戦争とはどんな言葉にも変換不能なものなのだ。まして戦死した者の代弁はなおさらだ。それでもあえてその役目を引き受けた人間もいる。

これは絵本というより『事実』の本である。

本著はまず、見開きのルソン島地図の後、戦場のジャングルで拾った『日本降伏す』と書かれた落下傘ニュースの現物コピーで始まる。敗戦を知らせるため米機がまいたものだ。

「まず開いてすぐ、子どもたちに事実の重さを知ってほしかったのです。それにはこれを見てもらうのが一番かなと思って」

本評を書くにあたり、訪問する機会を得たとき、作者は掲載の意図をこう説明された。一枚の紙片、写真、捕虜番号の人間荷札、そして作者の描いた絵の数々に、抑制された言葉。次の世代へ事実を伝えていくとき、視覚的映像や物のもつ力がいかに大きいか、彫刻家でもある彼女の感性の裏うちがそこにある。

途中こんな話も載せられている。ルソン島に慰霊に行った際、州知事からぜひ会いたいという知らせをうけ、出かけることになった。

「私は何を怒られるんだろうと心がふさぐ思いがしました。だって日本人は謝っても謝りきれないほど悪いことをしてるんですから」

ところが州知事は、戦禍の中で逃げまどう在留邦人婦女子を助けることができなかったことを許してください、と深々と頭を下げられたというのである。また作者はかつて飢えに苦しみ、果物をぬすんだ経験があった。罰を覚悟の上で持ち主の家へ一人でいき、精一杯謝罪した。そのときも、小さい子どもをつれての逃避行は大変だから、戦争がすむまでかくまおうと言われたのだ。

地獄に追いやられた側が追いやった者へ示す思いやる心は、戦争の暗黒さとは対極にある光だ。愛娘の死を経て当事者が見た光は、真実の向こうに深い悲しみを照らしだしている。

「順ちゃんの戦場」

*新美虚炎 著

発行　東京図書出版会、発売　星雲社 2,300円

＊にいみ・こえん　1917年生まれ。画家、彫刻家。熊本市在住。

民衆の側から歴史に光

「赤いシカの伝説」

*さねとうあきら 著

花伝社、発売　共栄書房 1,714円

子どもは現実を具体的な目で見ていく。だが多くの大人はその現実を無意識に避け、観念の世界に心を落ち着けようとする。さねとうあきらの作品は差別の構図を具体的にズバリと書く。子どもを生活者と見ず、夢の中にすむかのように描く他の作品と比べ、『児童文学』の本質を考えさせられる点はここにある。

舞台は今から千二百年前、平安京が開都したころ、はるか東北の北上川のほとりで都の軍勢と原住民のエゾは戦っていた。戦のさなかカリペはエゾの娘と和人との間に生まれる。やがてエゾの戦士として育ったカリペは自らの出自を知り、一人、京に住む親に会いに行く。だが、すでに母は死んでいた。僧になったカリペはそこで同じ境遇に生まれた青虫という少年と会い、大和からとられたものを己の手でとりもどすべく、盗賊となる。

題名の『赤いシカの伝説』とは自分を獲物とせず育ててくれた老オオカミを、今度は命がけで守ろうとしたエゾに伝わる子ジカの話である。それを聞かせた叔父はカリペに言う。

「相手がオオカミだろうと、傷ついたものをいたわるのがエゾの掟。お前の母は掟を裏切らなかったばかりに、裏切り者にされた」と。その赤いシカの彫り物をお守りに持つ青虫が一度はカリペをだまし撃つが、エゾの血にかけ、助けに来るシーンは圧巻だ。赤いシカとオオカミ、カリペと青虫は立場こそちがえ、権力者に翻弄される大衆そのものなのだ。大衆同士は、『知る』ことで互いの心を映しとり、いつしか理解を深めていく。

「経済ばかりか、軍事面でも、湾岸戦争をきっかけに次々にタブーが破られ、憲法違反の海外派兵まで実現してしまいました、『個々の幸せ』を踏みにじる国家の黒い影が、刻々と濃さを増していくのは、実に不安です」

初版以来、二十五年して復刻に踏み切った動機を作者はこう書く、大国が今、屁理屈をつけ他の国へ攻め入ろうとしている。そんな時代だからこそ教科書にのっていない歴史を掘り起こし、きっちり子どもたちへ民衆の側から光をあてた作品をとどける意味は大きい。

＊さねとう・あきら　1935年東京都生まれ。児童劇・児童文学の両分野で仕事を続けている。著書に「ジャンボコッコの伝記」など。

世界的視野の必要性問う

バグダッドが陥落した日、米国では、かつて制圧された歴史をもつ日本から来た若者が大リーグで満塁打を放つ。その二枚の写真は新聞の一面を飾り印象的だ。戦後五十数年は我々に様々な情景を映し出すが、第二次大戦とはそもそも何だったのか。世界史的に与えた影響からすると第一次大戦には及ばぬ、という疑問が常に著者にはあった。そして、メディアのつくりだした指導者の『虚像の誇大さ』こそが第二次大戦の最大、かつ唯一の特徴であったことに気づく。

中でも独特なのはドゴールへの評価だ。ヴィシー政権がドイツにとった行為（降伏）を認めず、自国の外へ出ると抗戦をとなえ、結果的に『自由フランス』と『レジスタンス』の神話をつくりあげた。その力は、方向こそ違えヒトラーに比肩すると言う。なぜなら、そこにはもはや民主主義的過程や大衆はなく、自己内にある理想のフランスが存在するだけだ。いわば、自意識の国家をメディアを通し「言葉」の力のみで戦勝国にまで押し上げた。その意味で政治の本質はほとんど文学に類似するのだとも述べる。

また、最も第二次大戦を欲したのが米国だったという見解も納得できる。米国は第一次大戦で除去しえなかったイギリスの植民地体制を破壊し、「自由で開かれた世界」をつくり、その上に君臨しようとした。その意味でアメリカ人の母親をもつチャーチルも、ファシズムのムッソリーニやヒトラー、粛清のスターリン、軍人の蒋介石に官僚の東条英機、みな戦後の米国支配体制のおぜん立てであったのかも知れない。

戦争の目的はけっして自国と対峙する一独裁者を排除したり、民衆を解放することにはないのだ。戦後の支配システムの中で主導権をうちたて、自国の体制をより世界へと広げることにある。その位置に立つとき、為政者にとり人の死はただの数字の問題となる。

戦争の世紀は終わることを知らない。ならば局地的視点からだけでなく、より世界的視野に立ち日常を見る必要性を、著者は問うている。

「第二次大戦とは何だったのか？」

*福田和也 著

筑摩書房 1,800円

*ふくだ・かずや　1960年東京都生まれ。慶応義塾大学環境情報学部教授。著書に「日本の家郷」「甘美な人生」など。

米の矛盾を日常的視点で

「アメリカ病」

*矢部　武 著

新潮新書 680円

「外から見たとき、いかにも人権意識が高く、民主主義が進んでいるかのように見せるのが上手な国です」。知人の中国系アメリカ人のその言葉を、マイノリティの側のやや厳しすぎる意見ではと考えていたところ、マイケル・ムーア監督の映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』を観た。銃社会の現実を追うドキュメントで、これまでの米国についてのマスコミのあまりに偏った情報に愕然とさせられた。

さらにイラクへの理不尽な先制攻撃である。今、アメリカは確かに何かがおかしい。そう感じている人は多いはずだ。この書は、そんな疑問に答えるべく現在陥っている米国の〈病〉を日常の視点から箇条的に取り上げている。

そこから浮かんでくる像は、得体の知れない強迫観念に脅え、それをごまかすため必死にあがいている姿だ。「常にポジティブである」ことに疲れ過半数が精神科へ通い、三分の二が肥満になりながらもジャンクフードとファストフードを手放さない。術後の後遺症の危険を知りつつ顔の手術だけでは満足せず、豊胸やペニス拡大手術にまで手をだす。そして最も「生き易い」マッチョでグラマーな「白人」への変身を願う。

さらに銃社会がその不安に拍車をかける。

毎年三万人近くの人が自殺や誤射も含め、銃で命を奪われている日々を著者は、国内で内戦が起こっているようなものだと言う。銃所持者は一般的に、声を荒げて感情的に話す人が多いが、時として冷静な語り口で国家が専制や独裁政治に走る抑止力として、「民主主義を守るため国民が銃で武装しなければならない」と信じきっている人にも出会うそうだ。そこにこそ、米国銃社会の根深さと真の怖さがあると著者は述べる。

自由を求め建国された国が、その自由ゆえの銃所持を解決できないでいる。そこに横たわるのは建国とともにひきずってきたアメリカの矛盾と、そこから生じる「差別」構造ではないのか。アメリカの影が、少しずつ日本と重なって見えてくる本だ。

＊やべ・たけし　1954年埼玉県生まれ米紙記者を経てフリージャーナリスト。著書に「少年犯罪と闘うアメリカ」など。

身体の性差に視点あて洞察

ある知人の女性に、「男性に『性衝動』と『腕力』を与えたことは神様の失敗よ」と言われたことがある。私も、漠然とこの二点に「男」として生きることへの疑問と不安の根っこを感じつつあったときだ。また最近では他の男性からも、似たような不安の呟きを聞くことが増えた。そんなときこの本と出合った。筆者は長くニホンザルやゴリラの行動観察をしてきた人だ。本書ではそれらをもとに人類の過去を類推し、現在を洞察しようと試みている。

とくに注目されるのが「食」と「性」「暴力」との関係だ。そのことを著者は、まず原猿類から霊長類、類人猿へと至るオスメスの体格差に視点をあて論じている。

夜行性でペア社会の時代にはなかった体格差は、昼間行動し、テリトリーが広がると一挙に変化する。外敵が増えたことで「分業」が起こり、オスに防衛が一手に任されたのだ。

オスには危険と引きかえに派手なパフォーマンスの力が与えられた。当然、力のあるオスは、メスとの交尾において優位に立った。

だが、興味を引くのは、類人猿だ。ゴリラやチンパンジーのメスがオスに求めるのは、「腕力」の強さだけではない。父系社会の中で、メスは群れと群れとの間を自由に行き来できる権利がある。それは、交尾相手が好ましくなければ別の相手を求め、移動できるということだ。それにより、核オス（群れの中心的存在）であっても、つねに交尾の相手が手に入るという保障はなくなった。メスを引き寄せるだけの別の「力」が必要となったのだ。それは、ただの「腕力」から「信頼」や「相性」へのステップを意味しないか。

また、三百万年前の原人の体重はゴリラ並みの性差があったが、現在の人間はチンパンジー並みに縮まってきていることもわかっている。オスの「暴力」や「性衝動」を抑制することと身体の性差とは、どうやら密接な関係があるらしいのだ。

古き「オス意識」のまま生き延びられるか。なんだかわずかなゆらぎが起こってくる本だ。

「オトコの進化論」

*山極寿一 著

ちくま新書 720円

*やまぎわ・じゅいち　1952年東京都生まれ。京都大大学院理学研究科教授。著書に「ゴリラ雑学ノート」など。

闇の本質を模索する鼎談

「人生は闇」とか、「人の心の奥には闇がある」とか、昨今よく言われるが、それではその「闇」とは何かと問われたとき、果たしてこれまでどれくらい的確に答えてきたのか。この書は文化人類学者（上田）、作家（高）、社会評論家（芹沢）の三人が各人「闇」に切り込み、「闇」の本質を見きわめようと、鼎談という形をとりながら模索している。

「闇」を高度経済成長の豊かさの影に隠れた、飽食ゆえの「生きる意欲の低下」ととる上田に対し、高は、ドストエフスキーや夏目漱石の作品上の言葉を例にとり、知識偏重の文明のみを「善」とした結果、究極は大量殺戮兵器へと向かう人間が根源的にもった矛盾、つまり「知恵の闇」ととる。ところが芹沢だけはただの悲観論で終わらない。明治以来、日本人が「世間」の中でしか自我形成されなかったことに触れ、現在その「世間」が急速に崩れ、自由気ままになったと述べた上で、今、新たな「価値観」や「制約」がないことによる孤独感や苛立ちがやってきており、「闇」とはあくまで次の世界が創られるまでの過渡的現象であるとする点で一線を画す。

その違いは、「闇」との向き合い方にもあらわれる。上田は「生きる意欲を向上」させるため、はみだしてもいいから「やむにやまれぬ契機や行動」を大事にすべきだと言う。高は人知の壁をのりこえるため、親鸞の残した宗教が提示する知恵の力とその応用を持ち出す。だが芹沢は、ある程度、自由に生きられるようになったことを評価しつつ、行きづまったときの「戸惑い」から脱するときの逃げ道を大人や社会が用意しておくべきだとする。

親鸞に関しては高が中心となって述べてはいるが、三者微妙に「闇」のとらえ方が違い、メインタイトルに親鸞の名がない方が、むしろ、この本の狙いは伝わったようにも思える。つまるところ、抱いている闇は個々人で異なり、それを見つめることからしか闇を超えることはできないことをこの三者のズレが浮かび上がらせているようだ。読後、闇が闇を呼び、一層深まったような気になってきた。

「親鸞と暗闇をやぶる力」

*上田紀行・高史明・芹沢俊介著

講談社＋α新書　800円

*うえだ・のりゆき　1958年東京都生まれ。
*せりざわ・しゅんすけ　1942年東京都生まれ。
*こう・さみょん　19532年山口県生まれ。

「希望の病」へ再生の道探る

結核、がん、エイズと、これまで時代を象徴する病が登場してきたが、現在、その患者数の増加、病状の広がりから、うつ病はまさしくその中心にあると言っていいだろう。この書は、うつ病を医療面からだけでなく社会面からも分析し、新しい理論と対応策を打ち立て、絶望から「希望の病」へと再生していくための道を模索している。

そもそもなぜ、これほど増加の一途をたどるのか。「ストレス」と答える人は多いが、著者は一歩踏み込み、そのストレスの原因を、同じ現象が起きた一九八〇年代の大不況下のアメリカ、イギリスと重ねて解明する。当時レーガンとサッチャーが進めた新自由主義、新保守主義、小さな国家への転換は、個々の自由と引き換えに「自己責任」の名の下の熾烈な競争へ人々を追い立てた。つまりたゆまぬ自己努力の強制の結果、息詰まる抑圧感が生まれ、人々の心を侵しだしたのだ。

政策的に追随する日本にも、それが十数年遅れて現れだした。今や、仕事も健康も老後も大きな国家という枠組みの保障は消え、勝ち組、負け組に象徴される「個人努力」の結果の二極化へ姿を変えた。

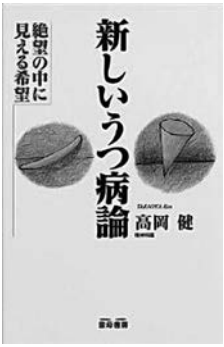
また、医療界もその兆候を見逃さなかった。一九八七年、アメリカでは副作用の少ない抗うつ剤、プロザックが認可される。また同時にうつ病の外にあって「障害」と見なされていたものをうつ病と同じ症状と診断し、枠の中に入れ、概念を広げていく。当然、患者の対象は、大人だけでなく子どもや青年にまで広がり、うつ病はどの世代にも起こりうる「心の風邪」となっていくのだ。

著者はこのようなうつ病の社会認知をある程度評価しつつ、米英のような過酷な競争原理を本質的に解決しないまま、薬だけが市場にあふれ出す流れに、日本もただ身を任すことへ警鐘も鳴らしている。うつ病が自分で自分の生き方を問う病だからこそ、そこに社会を変える希望も力もあると述べるのだ。

この本を読んで、「うつ病になって初めて自分らしさを取り戻した」という、私たちの作業所に通う女性を思い浮かべずにいられなかった。

「新しいうつ病論」

*高岡　健 著



雲母書房 1,800円

*たかおか・けん　1953年徳島県生まれ。精神科医。

他者の存在消す新たな課題

ウェブサイト上で十六信にわたってやりとりされたこの対談を読み終えて感じることは、異世代と「会話」することの困難さが近年ますます増してきているのではないかということだ。一九四八年生まれの笠井に対し、東は七一年。論点はかみあわず両者はしばしばすれちがい混乱する。だが何かそこに、現代がくぐらねばならぬ課題があるようにも思えてくる。

東によれば、人間だけが「他者の欲望を自分の欲望にする」という複雑な構造をもっている。相手がより幸せになることを欲している状態が、己の欲望ともなるわけだ。そのような、いわば他者を自己の中へ取り入れる人間本来の「欲望」が、動物的な「欲求」にとってかわられつつある。あたかも空腹を覚えた動物が食べることだけで完全に満足してしまえるような。そこでは他者の存在は消え、各人が外への回路を閉じ、自己中心で安穏な日常が広がっていく。それが「人間」の「動物化」だ。

たとえば「九・一一以降」をめぐる議論でも、「戦争」を歴史的にひもとき、あくまで観念的に追究しようとする笠井に対し、東はあっさり、戦争が「セキュリティ」の中へ溶解してしまったと言いきる。安全で不安をいだかない「動物的」な暮らしを実現するための戦争にとって、大統領がどんなことを口走ろうが、国家がどんなイデオロギーで戦おうが、大きな問題でなくなってしまう。

そんな両者の対立は、八〇年代の分析で、さらに激化する。サブカルチャーが巷にあふれたその年代が、マルクス主義を十分に精算しないまま誕生したとする笠井に、東は、高校生のころ天皇が崩御し、皇居前を訪れたが記帳台の寸前まで行き引き返した過去をふり返る。そしてそこに、天皇の死さえもドラマ化し消費しようとしていた自己の姿をよみとろうとする。

こうして幾度となく座礁する対論は「会話の可能性」というテーマも二次的に提起している。おそらくそこにこそ「動物化」された人間としての新たな課題があるのかもしれない。

「動物化する世界の中で」

*東　浩紀・笠井　潔 著

集英社新書 660円

*あずま・ひろき　1971年生まれ。著書に「動物化するポストモダン」など。
*かさい・きよし　1948年生まれ。98年「本格ミステリの現在」（編著）で日本推理作家協会賞を受賞。

「皮相上滑り」の開化を告発

明治の開化を「外発的」で「皮相上滑り」と嘆いたのは夏目漱石だが、明治以降、日本の急激な近代化はそれまでの近世という過去をまるで遺物のように葬ってしまった。本書はそんな中にあって、特にあやふやにされた感がある江戸という都市の被差別民の実像を、当時の被差別民自身による支配組織「弾左衛門」体制から分析しようと試みる。

弾左衛門は、江戸時代十三代続いた江戸・関東の被差別民の統治者である。世襲制で身分は長吏（穢多身分）に属し、江戸町奉行の配下にあった。管轄したのは、長吏、非人、猿飼、乞胸（大道芸人）に歌舞伎など各種の芸能。皮革、灯心などの専売権を持ち、関東全域の被差別民への支配権を背景に、旗本なみの屋敷に住み、財力は大名をしのいでいた。

なぜ、このような巨大組織が誕生したのか。幕末までの存続が示すとおり、長吏たちの利害と徳川氏の思惑が合致したと著者は見る。

江戸中期以降、江戸人口は百万人に達する。末端の仕事、例えば清掃、衛生対策、貧困者の救済などが当然増え、非人たちはそれら公務を任され、都市機能の重要な役割を果たしていく。非人には、非人人別帳に記載され定住する「抱非人」と、無宿の「野非人」がいた。野非人には元町民や農民もおり、飢饉、地震、火事のたびに増え、最も多いときで八千人、今の東京に置きかえれば八万人にもなった。

これら野非人問題に対処したのも弾左衛門だった。排除でなく迎え入れることで信頼を得、その中にはハンセン病患者もいたと記録されている。さらに三弦や胡弓を鳴らす「女太夫」は、幕府も規制しない江戸のアイドルだった。こんな非人社会の存在なしに都市江戸は成立し得たのか、というのが、この書の一貫したテーマなのだ。

だが大政奉還と同時に弾左衛門制度はなし崩し的に廃止、死牛馬処理など多くの特権は取り上げられる。実質的な差別は残ったまま歴史の一役を担ったプラスの遺産が消されるという、まさしく皮相上滑りの開化を、著者は豊富な資料を駆使し冷静に告発している。

「江戸・東京の被差別部落の歴史」

*浦本誉至史 著

明石書店 2,300円

*うらもと・よしふみ　1965年兵庫県生まれ。部落解放同盟東京都連合会職員。

生き方再考するヒント凝縮

「一回性の人生」

*梁　石日 著

講談社 1,680円

著者は一九三六年生まれの在日二世。独自の視点から問題作を発表し続けている。

青年期は同人誌で詩を書いていたが、組織（在日本朝鮮人総連合）を批判したことで、政治の渦に巻きこまれ挫折。その後、美術印刷業を起こすが、現在の金額にして十億の負債を抱え倒産した。仙台、東京と放浪の末、タクシー運転手として生活をたて、二度の衝突事故にあったのを機に退社、ついに一冊の小説を出版したのは四十五歳の時である。

この本は、そんな彼が四十六の項目にわたり具体的に自らの体験を引き出しながら、不安にたたずむ現代人に「いかに生きるか」を問うた語り下ろしのエッセー集である。

ここで一貫して流れるのは彼の「日本人」を見る目の確かさと温かさだ。タクシー運転手時代、酩酊（めいてい）し欲求不満をぶちまけるサラリーマンに、管理システムにからめられた心身の消耗と苦しみを感じ、高度経済成長のツケがそろそろ支払われる時期がきたことを察したという。そして彼に悪態をつく客にある種の同情を抱いていたと語る。

また、「生きぬく力」とは「自己肯定力」だと言いきる。もちろん昨今はやりの安易なプラス思考ではない。過去を過去としてどれだけ正確に「再生」し、自分を客観的に見られるかが鍵であり、その分今を生きる力につながるとする。過去を歪曲（わいきょく）したときから人は現在の自分と向き合えなくなるという言葉には、個のレベルを超え、朝鮮と日本との国家関係においても説得力がある。

さらに作家の目は、現代の若者をとらえる。大量消費の中で育った彼らの傷つきやすく、半面残酷な顔をのぞかせる根を著者は「身体の空洞化」と呼ぶ。個のルールが確立されないまま個室や携帯などが入り込むことで人と人との断絶が生まれる。生身の体の触れ合いが急激に消えた環境変化は大きい。これら共感できるいくつかの言葉を聞くと、同じアジア人としての作者の血に浸っていることに気づく。日本にいながらにして自分を少し離れた場から再考するヒントがつまっている書だ。

＊やん・そぎる　1936年大阪生まれ、作家。

自伝を超える優れた文学性

「朝鮮戦争の年に生まれて半世紀あまり経たひとりの『在日』二世が、何を失い、何を獲得しえたのか、そのことを忘れえぬ人々の記憶とともに書き留めておくこと」

初の自伝のモチーフを著者はこう説明する。熊本に生まれ、現在東大教授の職に就き、テレビ、新聞等で論陣を張る著者は、今や時代の人となった感さえある。だがこの書は、朝鮮と日本とのはざまで揺れ動き続けた著者が、一人の人間として、一世である親や過去の体験と正面から向き合うことで、自己の原点を再確認することを試みたものだ。

「在日」同胞や家族はもちろん、「日本」を語るときも、行間から温かさがにじみ、愛情があふれている。その根底には、廃品回収業を営み、厳しい状況にあっても決して人を見下さなかった両親から学んだ感性があるように思う。ハンセン病療養所・菊池恵楓園での回収も平気でこなし、患者と一緒にご飯を食べ、鍋をつつき、家に呼び入れることも多かったという。

そんな著者に大きな転機が訪れるのは、講義に失望し、図書館にこもっていた大学時代だ。自分の死と引き換えに抑圧者としての日本を告発した、あの金嬉老事件を目の当たりにする。たまりたまっていた閉塞感は一挙に限界に達し、ついに韓国の地を踏むことになる。そこで祖母や多くの親族、幼いころの「在日」の集落を思わせる村の風情を肌で感じ、何かがふっきれたことで、日本名「永野鉄男」を捨て「姜尚中」で生きる決意をするのだ。

メディアになぜ多く出るのか。その理由も明瞭だ。

「在日」が、常に朝鮮半島や「在日」の問題だけを話していればいいという偏狭な壁を壊し、イラク戦争や日米関係、日本経済を論じることで、新たな発言権を獲得することに狙いがあると述べる。

喜寿を過ぎ横臥する母が存命のうちに編もうと思ったこの書には、単なる自伝を超えた優れた文学性がある。また「在日」の歴史を学ぶ上でも詳細な下欄解説が目を引き、画期的な書になっている。

「在日」

*姜　尚中 著

講談社 1,575円

*かん・さんじゅん　1950年熊本市生まれ。東大社会情報研究所教授。

つくり手の思い伝える

「パンをめぐる旅」

*スーザン・セリグソン 著
市川恵里 訳

河出書房新社 2,100円

パンは古来、多くの国で主食とされている。「人はパンのみに生きるにあらず」に始まり、様々な箴言（しんげん）や諺（ことわざ）にも出てくる。またヒンズー教徒が神殿にパンを捧（ささ）げたり、アメリカ先住民が収穫の踊りで儀式用のパンで身を飾るとき、それは食物である以上に魂を象徴している。

この書は、パンをこよなく愛する米国の女性ジャーナリストが、世界の主だったパンを食しながら旅し、つくり手と語らい、パンづくりへの情熱や日常生活とのつながりを丹念につづったエッセーである。ページをめくるごとに街の喧騒（けんそう）や雰囲気、窯から上がったばかりの香りはもとより、パン労働という孤独な作業の奥に潜む、つくり手の祈りにも似た思いが伝わってくる。

町中に共同窯があり、各家庭でこねられたパンが運び込まれ焼かれた後、聞違いなくつくった家庭へ戻る文化が残るモロッコ。小麦に塩だけ混ぜ、動物の糞（ふん）を火にくべて客をもてなすベドウィンの質素な平焼きパン。毎週、八百トンもの小麦を使い、コンピューター制御で大量の添加物を加える世界最大の製パン所と、訪ねた場所も実にバラエティーに富んでいる。

「ワインの九十パーセントがぶどうの実でできるように、パンも本物の火と水、小麦でおのずからできる」。かつて大学で詩を講じていたニューヨークのパン職人の言葉が印象的だ。窯には精霊が宿り、パン屋は「付き添いの司祭、給仕」にすぎないのだと。

最後はパリ。パンの本場でもパン屋志望の若者が減っているそうだ。早起きで、暑くて、重労働。そこで年一度パン祭が行われ、有名店のパンを試食でき、子どもたちがパンづくりを体験できるという。機械による大量生産によって質の落ちたバケットの復活と、幼いうちからの意識変革という涙ぐましい取り組みがされているのだ。

結局作者の言いたいのは、グローバル化の波で消える地方独特の手づくりパンとその価値の見直しにあるようだ。パン職人だけでなく、手づくりを生業とするすべての人が勇気づけられる一冊だ。

*Susan Seligson　1954年ニューヨーク郊外イースト・メドウ生まれ。ジャーナリスト。

司法界の影見渡せる記録

著者は、公式には六回、不受理を入れれば十三回に及ぶ再審請求の末、日本では初の確定死刑囚からの無罪判決を勝ち取り、一九八三年七月十五日に即日釈放された。だが三十四年と六カ月の獄中生活から解放された著者を待っていたのは激励の声ばかりでなく、心無い人々からの中傷も少なくなかった。

この書はそんな体験も含め、過酷な取り調べから自白偏重の裁判、死刑制度の問題点まで、現在の司法界の影を見渡せる肉声の記録集となっている。

「人殺し、再審するな」「嘘で出ても俺が殺す」など、本人に見せられることなく拘置所が保管していた郵便物の中身もさることながら、冤罪の恐ろしさを知ってもらうため全国を回って体験を話しても、必ずあるのが「真犯人はいるか?」「補償金は?」など遠回しに「無罪」を否定し、疑う質問である。著者はこれらの発言を、この国の裁判がいかに信用されていないかの証明だとし、国民を不信に陥れたのは、裁判官が信頼に値する判決文を書けなかったからだと強調する。

また、冤罪だったにもかかわらず、確定判決の取り消しも年金支給も、司法界や警察からの謝罪一つない。これは世界ではアメリカと酷似し、最低のレベルだと言う。

サブタイトルが「私の見送った死刑囚たち」となっているが、刑場へ百六十人近い囚人を見送った言葉には説得力がある。

刑執行の朝、独房前の廊下を歩く看守たちの足音。自分だと覚悟し、思わず正座する姿や、そうでなかったときの安堵感や胸苦しさ。食器口から差し出される、刑場へ向かう仲間の最後の握手と言葉…。人が人を極刑をもって処罰するということは、国家の名のもとに行われる個人レベルの「報復の連鎖」ではないか。

数度お会いし、大牟田諏訪川で貝掘りをともにしたときの気さくな笑顔の奥には、この本質を問う苦悶があったのだ。

被害者の人権救済も叫ばれる昨今、不合理な死と隣り合わせに生かされた著者の肉声は、加害、被害の壁を超え重く響いてくる。

「免田栄　獄中ノート」

*免田　栄 著

インパクト出版会 1,995円

*めんだ・さかえ　1925年熊本県球磨あさぎり町生まれ。死刑制度廃止の講演活動に携わる。

生みの喜びと苦しみ告白

昔なら「作家」つまり「小説家」を目指した若者たちが、現在、評論、エッセー、ルポルタージュ、ノンフィクションの仕事を目指すケースが増えているという。この著はそれを受け、「評論」とはいったい何かを単刀直入に述べ、生み出す喜びと苦しみを告白している。

そもそも評論と論文は違う。著者は「閃(ひらめ)きの評論、地を這(は)う論文」と断言する。両者が時として混同されるのは、日本人が「意見」と「事実」の区別が苦手ゆえ起こるそうだ。評論は「事実」を重ね実証する論文とは違い、あくまで作者の「意見」である。直観を働かせ、鮮やかな手際で謎を解き、飛躍した文章で読ませる。だから面白い。小林秀雄はもちろん、梅原猛、吉本隆明らもしかりだ。

また柄谷行人著「日本近代文学の起源」の考察には一章を割いている。柄谷は論の導入に前衛でも野心的でもない小説をもってくるときがあり、この「とぼけたワザ」は見習うべきというくだりはうなずける。

後半は評論家でもある著者の体験が切実に語られる。恩師や知人を通じての出版社探し、安い原稿料でようやく出版にこぎつけてもなかなか売れない不安。貧窮する生活と、自著をめぐる批判に対する神経をすり減らす論争のやりとり。精神安定剤や抗うつ剤を飲みながら、それでも書く覚悟がないなら、とてもやっていけない仕事だと忠告する。

「評論家入門」

*小谷野　敦 著

平凡社新書　798円

そこで勧めるのがエッセイストだ。小説は元来、尋常でない事件や人を描くものだが、その形式が時代とともに頭打ちになってきた。それに反してエッセーは、生活とともに題材が豊富に生まれる。しかも日本の文学的土壌に「随筆」として長く地位を保ってきた歴史があり、今後発展の余地ありと予見するのだ。だが、それも大変な道程に違いなく、重要なことは、自費出版でない、あくまで商業出版を目指し書き続けることだと説く。

「有名評論」のランクづけもついていて、AからEの評価がされている。これまで目にした書がどの位置にあるか、ぜひこの本を手に取って楽しんでいただきたい。

*こやの・あつし　1962年茨城県生まれ。国際日本文化研究センター客員助教授、東京大学非常勤講師。

生態系に縛られないセックス

栄養摂取、呼吸、循環、排出排泄、セックス―もしこれらの中でなくても生きられるものはと問えば、間違いなくセックスだろう。だが他の活動を司る細胞は、そのセックスの行為（受精）からしか誕生しない。つまり「体細胞」と「生殖細胞」には根本的な役割の違いがあり、奇妙なねじれの中で私たちは生きている。著者はそれを経済的活動と繁殖活動とし、ヒトは生物の中でも、特にその両者の間に開きがある存在であるとする。それを基本にやや学術的に、ヒトは何の目的でセックスをするのかを論じていったのがこの本だ。

分かりやすいのは子づくりの例だ。多くの生物ではセックス、生殖、経済的活動は表面上、混然一体となって進行する。経済的成功者（なわばりの広いもの）が貧しい層より子どもの数は当然増えることになる。だがヒトは金持ちの方がむしろ子どもが少ない傾向にあり、たちまち遺伝子を残すための競争原理では説明がつかなくなる。

その一因として著者は、米や麦の栽培、動物の家畜化らによりヒトが、地域生態系に縛られず、むしろそこからはみだす存在となったことを上げる。もちろん自己を客観視し、相手の思考を想像する〈自我〉のおかげで、豊かな文化や複雑な社会を生み出しつつ、他の生物には見られない「性」の形態、果てはレイプや戦争時の暴行といったものまでつくりだした。つまり、文化や社会的側面がヒトのセックスには大きくかかわり多面化しているとするのが著者の考えだ。

その例でいえば中国で、自国の「一人っ子政策」に対して反日デモのような行動をした話は聞いたことはなく、それも〈種〉としてのヒトが歩んできた歴史を物語っていることになる。

著者はあくまで遺伝子は「器」であり「意志」ではないという立場を通す。

「性」に限らず「負」の側面を直視したがらない有限な人間が、より長い生命を持つ遺伝子を特別視するとき、そこに、寄りかかり責任転嫁しようとする姿勢がありはしないか。著者の執筆の思いは、実はその点にもあるようだ。

「ヒトはなぜするのか」

*ナイルズ・エルドリッジ 著
野中香方子 訳

講談社インターナショナル 1,680円

*Niles Eldredge　アメリカ自然史博物館無脊椎動物部長。

客観的な「被差別」への視線

前著『被差別部落の青春』は鮮烈だった。堅物の専門書と違い、現代を生きる出身青年の率直な皮膚感覚に溢(あふ)れていた。これは、その第二弾と言っていい。

とにかく具体的で、わかりやすい。

「部落ってなに？」「部落民って誰？」「部落問題の見方」「部落差別は、なぜ残っているのか」「部落問題をなぜ学ぶのか」「部落差別のなくし方」という六つの章題からもそのことは推察できる。

歯に衣きせぬ論は今回も健在だ。著者は回顧する。会社を退職し、失業保険をもらいにいった際、同和対策事業の一環で規定の金額より多く受給できたとき、「部落に生まれてよかった」と心底思えたと。差別落書きでも実行者の精神的幼さに呆(あき)れるだけで、傷つくことはないと言い切る。

それより、「見えにくい差別」と闘うべきだと主張する。就職差別、結婚差別がそれである。

被差別部落を美化も卑下もせず、客観的に見つめる視線は、一見ドライ過ぎるかのようだ。だが自己の絶対視を避け相対化する奥には、奇麗(きれい)ごとを並べるだけでは突破できぬ現実に少しでも風穴を開け、部落解放へ向け新たな地平を開こうとする熱い思いが宿っている。

綿密な取材と的確なデータを駆使している点も見逃せない。例えば地方自治体の行った同和地区外と地区内の認識調査をもとに、これまでタブー視されていた被差別部落への偏見や実態のとらえ方の双方の誤差や同一性を浮き彫りにし、本質へ迫ろうとする。

被差別部落民の規定に「中心」と「周縁」という概念を起用する点も画期的だ。「部落民」であると自覚する者が「中心」にいて、自覚していない者はもとより、本書を読んだ者までひっくるめ「周縁」、すなわち「部落関係者」とする考えだ。

気がつけば障害者を始め、多くのマイノリティーに囲まれている私も、その資格は充分にあるのかもしれない。何だか、被差別の側で生きることに勇気と力が湧(わ)いてくる、そんな希望の持てる本だ。

「はじめての部落問題」

*角岡伸彦 著

文春新書 767円

*かどおか・のぶひこ　1963年兵庫県生まれ。神戸新聞記者などを経て、フリーのノンフィクションライター。

旧樺太残留日本人妻の「戦い」

人は、人格に善と悪両面を内在させ生きている。だがそこに支配、抑圧、差別の状況が加わったとき、必然的に悪の面が拡大、増幅される。その究極が戦争である。そのとき個人の存在は否定され、一個の数字と化し、ときに歴史から抹消される。

この著は戦前、旧樺太、現在のサハリンに渡り、戦後、様々な事情で残留を余儀なくされた日本女性たちの歴史を丹念に追うことで、歴史の闇に葬られた事実の重みを蘇らせる。そこから浮かび上がるのは、「残留」でなく「放置」に近い対応しかしない国家の冷酷さである。

日本国籍をもつこと。これが引き揚げ該当者の絶対条件だった。ところがサハリンには「徴用」の名のもと強制連行されてきた人を含め、四万三千人近い朝鮮人がいた。

皇国臣民になることを強制するため、創氏改名や日本語教育により、いわば日本人以上に過酷な義務を背負わされたにも拘わらず、戦後、彼らは、政府の引き揚げ対象から外されたことになる。犠牲となったのはその朝鮮人と結婚していた日本人妻たちも同様だ。ソ連領となる混沌とした地で、生きるために結婚せざるを得なかった女性も少なくない。しかも、妻となった女性を待っていたものは、日本への憎悪を抱えた夫からの暴力だった。国家の無惨な失策のつけを、国家から置き去りにされた者が支払わされる縮図がそこにはある。

そんな中、「日本サハリン同胞交流会」の奮闘は見逃せない。故郷を同じくする者が「国がやらぬのなら自分たちで」を合言葉に、サハリンに残留日本人はいない、と言い張る国を動かし、一時帰国のための旅費、滞在費を勝ち取っていく。

玉音からの数日後、ソ連に撃沈された引き揚げ船の惨状も詳述されている。国際政治上、八月十五日は単なる敗戦と戦闘放棄の呼び掛けであり、正式停戦はミズーリ艦上で調印された九月二日だそうだ。殺戮の戦場にあっては一国の道理など通じぬ状況が、多くの犠牲者の声なき声となって胸に迫ってくる書だ。

「置き去り」

*吉武輝子 著

海竜社 2,625円

＊よしたけ・てるこ　1931年兵庫県生まれ。東映宣伝部退社後、文筆生活に入る。著書に「ブルースの女王淡谷のり子」など。

微かな響きに耳をすませる

「書評のおしごと」

*橋爪大三郎 著

海鳥社 2,625円

一回八百字の「書評」も五十編集まれば四万字、原稿用紙でちょうど百枚の量になる。かりにもし、同じ評者の「書評」を一冊の本にまとめたとしたら、どんな主調音が流れてくるのか。小説でもない、一つのテーマを思索した評論でもない。ちぐはぐでいて、何か評者独自の通底した世界と情報の発信が見えやしないか。私自身、本紙への「書評」が四十回を超えたあたりからそんなことを漠然と考えていた折、嘘だろうというように、そのままを本にしたものが現れた。

と言ってもこれはスケールが違う。何と二十年にわたり、新聞や文芸誌を中心に書かれてきた「書評」百九十八編を、八つのジャンルに分け編集、「書評の最良の教科書」と銘打っているのだ。

「書評」をすべて読み終わり、大きく三つの読後感に浸された。

一つは、評者と同じように共感を持ち、本の内容へ興味が湧き上がることで、今すぐ手にとって読んでみたいという思い。もう一つは直接本を読まなくとも、「書評」だけで何だか過不足なく本に目を通したような気になる錯誤した充実感。更に一つは、読む視点は読者各様であることは重々承知しながらも、どうも勘所がずれているのではないかという、評者の見識への疑いに近い異和感ともどかしさ。

あとがきで著者は言う。

「書評」は書き慣れることがない、難しい作業であると。最後まで本を読み込み、耳をすまし、聞こえてくる微かな響きを手がかりに最初の一行をたぐり寄せる作業に半分の時間が必要なのだと。けだし納得である。

ちなみに、対象となる著者の数の多い方から列挙すると、吉本隆明（五回）、竹田青嗣（四回）、加藤典洋、西部邁、柳美里（二回）、その他多彩な顔ぶれで、その偏りのなさに驚かされる。できるだけ幅広い分野の作者と良書を積極的に紹介しようとしてきた評者の姿勢もうかがえる。ネット書評のような場も増えている中、書き手、読み手の参考本として気軽に開くのにもいいかもしれない。

＊はしづめ・だいさぶろう　1948年神奈川県生まれ。東京工業大学大学院教授。

一局に集中させない思考

二〇〇三年世界陸上パリ大会の末續慎吾選手の活躍は記憶に新しい。短距離は欧米人にかなわぬという常識を覆す二百メートル銅メダルの快挙だった。彼が「ナンバ」という古武術を活用したことは有名だ。それまで西洋から入った腿を高く上げ地面を強く蹴るという「常識」かつ「正しい走り」から一転、足首の柔らかさという日本人の利点を生かし、地面を這うように抵抗を少なくした走法が、我々の身体に新たな可能性を感じさせてくれた。

明治維新から百四十年近くたち、その間、失われてきたものに視点を当て掘り返そうという動きが一部にある。この書も一人の武術家をルポすることで「身体観」の変容と回復に迫ろうと試みている。

西洋流の筋トレは、「支点」をもとにそこと連結する筋力など「局所」を鍛えることに終始しがちだ。針金の一部を繰り返し曲げるように、ある限られた個所が頻繁に使われ、疲労しやすく故障の原因になる。

また、脳を中枢として各末端に指令を与えるとする身体像も、政治や会社の中央集権的構造にも似て、同じ危険を孕んでいる。「支点」や「局所」にあたる個々人に負担がかかり、消耗や抑圧が顕著になるのだ。

そこで甲野は、疲弊した制度や人間の在り方に風穴を開けるためにも、一局に集中しない身体観が必須だとする。歩行が変われば思考も変わるとまで断言する。応用はスポーツに限らない。フルートやピアノの構え、介護術に至るまで、写真入りで詳しく説明してあり、すぐにも試せる実用書にもなっている。

養老孟司との対談もあり、かつて労働の場での身体の使い方とそこで用いられる道具は、セットだったと説く。今は、身体の鍛錬でなく道具の進歩にばかり向かうことで、例えば手術などの出血量の基準も「技」のない執刀者のレベルに合わせられていると危惧する。便利さのみを求める現代に、身体の感覚を取り戻す行為は、なかなかの至難の技だが、自らの日々の修練から生まれる甲野たちの言葉は重い。

「身体から革命を起こす」

*甲野善紀、田中　聡 著

新潮社 1,470円

＊こうの・よしのり　1949年東京都生まれ。武術家。武術稽古研究会「松声館」を設立。

「老い」テーマに時代批評も

その著書において常に時代に刺激を与えリードしてきた「思想家」が現実に「老い」を迎えたとき、どのように向き合い、どんな言葉を発するのか。そんな素朴で切実な問いに応えてくれるのがこの一冊だ。

まず初めに著者は断言する。老いは自然にやってなどこず、階段を踏み外すように突然に訪れると。自然に年をとるには、自分なりの努力が必要なのだ、と。

その他、ますますつまらないと思ったことはやらなくなったことや、「日本語をローマ字にして使うからワープロは嫌だ」「老人は死と生の間にいて死と生の両方を見ている」等々、何となく想像できても、なぜかこの人が発言すると鮮明なイメージとして伝わってくるから不思議だ。

ただ、そんな彼も、ここ数年の日本社会の急激な変化は予想外だったようで、欧米型資本主義社会への雪崩を打った移行を例に挙げ、生活への影響を指摘する。出版業界の不況はもとより、隠居後、楽しみにしていた個人的興味のある仕事もやる余裕がないとこぼし、「老い」をテーマにしつつ、日常と連結した時代批評にもなっている。

それは意外な発言にも現れる。例えば、首相の靖国参拝で他国からの批判を「もう充分もとはとったんだから、日本ばかり責めなくてもいいだろう」と一蹴するなど、おや？と首をかしげざるをえないところも多い。だが、ちょっと周囲を見渡せば、案外この世代の本音はこんなところにあるのかと、これまでの保守層からの支持ぶりも納得させられる。

結局、彼にとり、『生涯現役』であることは、党派を超え、声なき声の主（大衆）に寄り添い続けることなのかもしれない。四十八の項目を読み通したとき、終章にある「人間は自然（他者や自己も含む）に働きかけているときのみ価値をつくり、有機的な生きた自然として存在できる」というマルクスの理念が浮かび上がってくるのも、その姿勢と通底する。

「老いて反省することが増えた」という著者がこれからどう歩くのかますます楽しみな、同世代異世代ともにオススメの教則本だ。

「生涯現役」

*吉本隆明 著

洋泉社 819円

＊よしもと・たかあき　1924年東京都生まれ。詩人・思想家。東京工業大卒。

東アジアは「世界の縮図」

「数字は嘘をつかない」とは逮捕された某ＩＴ社長の言葉だが、こと環境問題にもこれはあてはまる。それがまず本書を一読しての感想だ。次に世界の未来は、良かれ悪しかれ中国が鍵を握っていること。さらにその中国の方向性に、今後、韓国と日本が大きな影響を与える可能性があるということだ。

新書とは思えぬ重厚な質を支えるのは、二十三名の執筆陣と監修者を含め六名の編集者の専門性の高さによる。今、中国を始め、東アジア各地に刻々と進行しつつある環境破壊へ警鐘を鳴らさんとする気概が迫る。

中国から韓国や日本へ、酸性雨、黄砂、高濃度の農薬のついた毒葉（ドシチョイ）が押し寄せる一方、日本からは鉄、銅のスクラップを始め家電製品やパソコンの廃棄物、さらに企業による公害が輸出され、韓国からは日本へ、海を渡り大量のゴミが漂着してくる。それはもはや「日中韓」が、衣食住の表から裏まで運命共同体であることを物語っている。

日本の過去を、まるで写し絵のように見事に後追いする中国と韓国。急激な経済発展のもたらす利便性だけでなく、公害と環境破壊という負の側面まで踏襲し、現在も、因果は入り乱れ、三国関係は歪に絡まりつつある。

その対策として求められるのが、「国境」を超えた情報提供と草の根での取り組みだ。

例えば、日本と比べ公害対策が立ち遅れているかに見える中国、韓国では市民が共同で出資し建設する太陽光発電や家畜の糞を使ったバイオガス設置が、むしろ急速に広がりつつある。エネルギーを政府や電力会社の専門分野とせず、地域で造り出そうという意識は、日本も見習うべきだ。さらに中国では今後、都市と農村の経済格差が拡大し、貧しい地域は原発や産廃施設を押しつけられざるをえない現状が生まれるのは必至だ。その構造を打ち破るヒントも今年、水俣病「公式確認」から五十年を迎える日本が握っている。

足元をもう一度確認しつつ、教訓をどう生かすのか。東アジアが、まるで世界の縮図として見えてくる一冊である。

「環境共同体としての日中韓」

*寺西俊一 監修
東アジア環境情報発伝所 編

集英社新書 735円

*てらにし・しゅんいち　1951年生まれ。一橋大大学院経済学研究科教授。

数十年前に出版された創作童話の復刻版を刊行する出版社が増えている。不朽の名作に、再び光が当たりつつある背景は何か。今年二十四年ぶりに復刊された、さねとうあきら作、井上洋介・絵「ゆきこんこん物語」（理論社）について、小規模作業所「夢屋」代表で文筆家の宮本誠一さん＝阿蘇市＝に、その意味を寄せてもらった。

二十四年ぶり復刊された創作童話「ゆきこんこん物語」に寄せて

大人に洗脳される子どもの「白昼夢」

ある児童文学をめぐる鼎談で、『ゆきこんこん物語』の作者さねとうあきら氏は、少年時の「戦争体験」が自らの創作の原点であると明かしています。子どもも子どもらしく精一杯、敵と戦ったという実体験は、えてして子どもを「社会」から切り離し、特別な存在に据えようとする昨今の風潮を危機としてとらえるのです。大人との共通基盤としての現実認識を放棄せず、子どもの心の襞に迫ることは、「二度と大人に騙されてはならぬ」という信念の結実へと繋がるとも言えるでしょう。彼の文学の核は、そこにあります。

本著に収められた三編の創作民話も、人間の心の深部にある醜さと、それゆえもたらされる悲劇と美しさが根底に流れています。

作者の他の作品もそうですが、まず、本作品にも、被差別の状況におかれた主人公が登場します。貧しく身売りするしかない少女や、うぬぼれが強く間違った教えも鵜呑みにしてしまう世間知らずの姫。そして、盲目のため、村でのけ者にされる孤独な少女らです。そこに「ゆきんこ」や「鬼」の悪戯や善意を絡め、よくあるパターンなら、薄味の笑いとペーソスにけなげな人生訓めいた話が展開されるところですが、ここでは一味も二味も違った仕組みが重層的に仕掛けられます。

「ゆきんこ」や「鬼」が、むしろ少女たちの無意識に潜んだ人間の本質をあばく役割を果たす点がそれです。特に『おにひめ』の一編は象徴的で、ある意味、不気味です。

美貌の姫は大臣から求婚され都へと向かいます。途中、鬼の仕業の雪崩に遭い、しかも人間に化けたその鬼に助けられ、老夫婦の家へ辿り着きます。ところが、「やさしい人には気をつけろ」との母親の助言をひたすら信じたばかりに、二人まで誤解して殺してしまうのです。動顛した彼女が逃げ込んだ小屋には例の鬼がいて、お前のような人間は鬼になって俺の嫁になるしかない、とうそぶき、彼女は呆然とします。

これはまさに、大人社会に洗脳された果ての「白昼夢」です。やみくもに信じさせられることの裏に隠された〈恐怖〉を「物語」という陰喩で、子どもたちの「生命力」と共振させ、伝えようとしています。

対等な生活者として子どもをみくびらず、がっぷり四つに組むことに賭してきた作家ならではの作品集の復刻の意味は、真にここにあるのではないでしょうか。

「ゆきこんこん物語」

さねとうあきら作、井上洋介・絵

人生顧み運動の意味問う

七〇年代後半から八〇年代、大学で学生運動の真似事をした者らにとって、全共闘は亡霊のような存在だった。

学内からはその残滓さえ消え去ろうとしていたが、ときおり思いもかけぬ場から遺物が掘り返され、厄介なテーマを突きつけてきた。関係本を読み漁っても、既に物語の中に収められた「読み物」は、現実という地点でリンクし合うポイントがどうしてもずれてしまう。況や、運動に興味のない一般学生はなおさらだったろう。

そんな中、まるで手漕ぎボートに乗るように霧を掻き分け、一人の全共闘オヤジが語りだした。しかも、これまでの追想やルポ的なものとは手法がまったく違う。感情をできるだけ排し、「思想」としての普遍性を探りつつ、運動から一歩、距離を置いた場所から分析している。よって現在までをどう生きたかも重要な観点となり、十年ごとに区切って主だった社会事象と絡め伝えている。つまり、個人を出発点としながら、世代共有の問題を再検証しようとする試みなのだ。

「思想としての全共闘世代」

*小阪修平 著

ちくま新書 735円

著者にとって全共闘運動は、向こうからやってきた嵐のようなものであり、運命的に人生の一部を「つかまれてしまった」対象だ。そこから学んだのは他者や自己と向き合う「態度（対面）」そのものである。だからこそ、「対面」を重視してきた人生を語ることは運動の意味を問うことにもつながってくる。

また、多数の党派に分かれた一番の理由を方針でなく、感性の違いと断言する点や全共闘はそもそも実態のない個人の意志の磁場であった等、なるほどと頷くところも多い。

団塊の世代が続々と定年を迎える今、周囲にもちらほら一物ありそうな？初老の姿を見かけるようになった。もし次世代との会話がなされるとすれば、むしろこれからではないのか。

「シンパ（支持者ぐらいの意味。シンパシーからきた言葉）」というように平易な説明も随所にあって、当時をまったく知らない者も入っていける新しい形の現代史本だ。

*こさか・しゅうへい　1947年岡山県生まれ。評論家。

政策、地方からとらえ直す

下流社会の出現が問われ久しいが、今、地域格差も拡大の一途をたどっている。なぜ、地域で食べられなくなってきたのか。この書は、これまでの政府の打ち出してきた国土計画（コメ、森林、新産業都市、リゾート等）を始め地域政策を地方からとらえ直し問題点を提起することで、再生の道を示していく。

まず第一にあげるのは地域の実態を無視した横並び政策の打開である。小河川の護岸までコンクリートで埋めつくした公共事業中心の「道橋政策」、外国産材輸入の自由化にたちうちできず荒れたままの人工林。各地域の季節や風土を計算に入れないコメ一辺倒の農業など枚挙にいとまがない。その中で、皮肉にも、大分県大山の「ウメ、クリ植えてハワイへ行こう」や「一村一品運動」、徳島県上勝町の柿の葉、紅葉、南天の実などを利用した高齢者による「妻物」の生産等、一律政策を脱却した地域が、むしろ特性に応じた収益性の高い経営を行ってきた事例を紹介する。

観光も、巨額投資の箱物でなく、地方の歴史と文化から生まれた建造物や自然を土台にした成功例（棚田のオーナー制など）をあげ、都市住民を巻き込んだ取り組みと、「田舎」そのものを産業とする「地域」のブランド化が必要だとする。

その根幹となるのは「地域福祉計画」を基本理念に据える考えである。住民が豊かに安心して暮らせる環境づくりは、おのずと地場産業も活気づき、地域での循環型経済の形成へつながるのは自明の理だ。その意味で、公営住宅法の改正など最低限のセーフティネットを取り払った小泉政権による構造改革の負の側面は大きいということになる。

今後、地域再生に住民グループやＮＰＯは不可欠の存在だが、「協働」という新しい関係をつくる上でも、地域住民の意見を反映した「条例」づくりは重要である。

湯布院町（現由布市）の「潤いのある町づくり条例」は大いに参考にすべしとの意見は、同じ九州にいる者として心強いメッセージだ。

「地域再生の条件」

*本間義人 著

岩波書店 777円

＊ほんま・よしひと　1935年東京都生まれ。毎日新聞社編集委員、九州大学大学院教授を経て、法政大学名誉教授。

深い畏敬にじむ作家論

「太宰と井伏 ふたつの戦後」

*加藤典洋 著

講談社 1,575円

数度の自殺未遂と心中未遂、薬物中毒による入院、作家として絶頂期での女性との入水自殺。太宰治ほど、破天荒な「生」そのものがスキャンダラスに語られてきた作家はいないかもしれない。

この書は、彼の没後発表された『人間失格』を中心に、師である井伏鱒二の影を探り、「ギリギリのところで、正直に」作中に描き出されている井伏への思いに迫ろうとする。

周知のように『人間失格』は、それまでの太宰の実人生の「事実」を並べ替え、主人公「葉蔵」の手記として語られている。作者はここで現実に照応する人物がない「堀木」と、なぜか作品に登場しない井伏に着目する。両者を結びつける試みは、既に他の論者も行い、それらを評価しつつも、鍵を握るとされる太宰夫婦がモデルで登場する井伏の作品『薬屋の雛女房』の解釈に異論を唱える。

これまで、精神病患者（太宰）の描き方に二人の信頼関係を断絶させる要因があったとする諸説に、心中未遂後離縁した妻（小山初代）を井伏が予想外に温かな筆致で描いていたことが太宰には衝撃だったとする。しかも、井伏が抱いた離縁に対する非難を、太宰は嗅ぎとった。当然、執筆中だった『人間失格』の「堀木」の像に、彼への屈折した感情は投影されることになる。

さらに、『散華』『姥捨』『ヴィヨンの妻』と関連する作品が随所に挙げられ、自死の直前の心理を、重層的に読み解いていく。特に戦後に生き残った「後ろめたさ」と「文学者としての責任感」は、それまで作品を書くことでとれていた心のバランスを崩壊させるに充分だったと指摘する。

終盤は三島由紀夫の『仮面の告白』との対比、死の符合性が語られ、二十数年を隔て互いに「正義」という苦悩に倒れたことを宿命として位置づかせる。

『黒い雨』の有名な「正義の戦争より不正義の平和の方がいい」という「重松」の科白が『人間失格』への井伏らしい返歌だとするくだりは、作者の両者への深い畏敬が感じられ、二者のユニークな作家論とも言えそうだ。

*かとう・のりひろ　1948年山形県生まれ。文芸評論家。

「人間本来」の営み紹介

「農のある人生」

*瀧井宏臣 著

中公新書 840円

一九九九年に農業基本法が三十八年ぶりに改定された。農業への市場原理や企業の参入を促し国際競争力を向上させる、いわばこれまでの小規模農家主体の在り方に抜本的転換を迫るものだ。食料自給率四〇％、六十五歳以上の農業従事者が六割に達する中、耕作放棄地は増加し、今や日本の農業は瀕死の状態である。個人経営を集約し大規模化する法改定はカンフル剤を注入し、九死に一生を得ようとする苦肉の策といえないこともない。

そんな中、むしろ農業の柵をなくし、より広い層へ働きかけ、国民一人一人に形にとらわれない「農ある生活」に携わってもらうことで再生を目指そうと、全国のユニークな試みをレポートしたのがこの一冊だ。

農業は果たして作物をつくりだすだけの営みなのか。読了し見えてくるのは土や堆肥づくり、作付け、草とり、収穫など適期ごとの活動がただ生産だけを目的とするのでなく生活の中に節目をつくり、「協働」の充実と潤いをもたらす要素が大きいということだ。もちろん、自然環境の保全面も含め、魅力を感じた人たちが、今、棚田やミカン一本のオーナーから、クラインガルテン（小さな庭）での週末や月末農家、ベランダでの一㎡農園、地方へ定住しての「半農半X」生活、そして団塊世代の定年帰農と制度を超え、個々に動きだしている。土を踏みしめ風を感じ汗することがけっして特別でなく「人間本来」の営みであることが具体例を挙げ述べられていく。

NGO「風の学校」を主宰した中田正一氏の言葉は印象的だ。

サービスや情報など第三次産業は風向きだけで変動する上潮、工業など二次産業は月の引力の影響をうける中潮、農業を含めた第一次産業は悠久の流れを保つ底潮というのだ。万人が豊かな底潮に乗った生活、そこに成立する文明や文化こそ今求められているのではないか。

作業所運営の傍ら農作業をするようになり、土をいじっていると硬まった感覚が和らぐ体験だけからでもぜひお奨めしたい。「脳」の次は「農」の予感が。

*たきい・ひろおみ　1958年東京都生まれ。ルポライター。

「歌」と時代背景に自分史も

作者は一九五六年生まれ。オウム真理教の信者を内側から、ごく自然体で撮影したドキュメンタリー映画『A』で国内だけではなく、海外でも高く評価された映画監督であり、最近は多方面で活躍する著述家だ。

だからということもないが、軽いタッチの題名と思いきや、ページを開くとただの紹介文でない、読み応えのある一冊に仕上がっている。

一章ずつが雑誌に連載された一話完結もので、二十五の歌をキーに、それぞれの楽曲と歌詞の成り立ちが時代背景や作者の自分史と絡め展開されており、しかも本人が辿った時々の内面が正直に描かれている点で私小説顔負けなのだ。あれあれっと読み進むうちに、最後には、井上陽水の「傘がない」のメロディーにのって、初キッス?の甘酸っぱい場面まで登場したりする。

全体で繰り返し述懐されるのは、自分が学生運動にも就職活動にも乗り遅れてきたモラトリアムの世代であるということだ。しかし、作者は頑なに「世代」でなく、「個」の営みや挫折のディテールを詳細に書き込む。それは、他の著作でも主張する本来の自由な発想を取り戻すため「三人称」や「複数」でない、「一人称・単数」が主語となった語りや思考の復権を目指しているようにも感じられる。

個人的には、童謡の章での「放送禁止歌」のくだりが興味深かった。

NHKの従軍慰安婦をテーマにした昭和天皇の戦争責任に触れる番組に、代議士が介入した内容改ざん問題と、自らの番組が納得のいく説明もないまま撮影中止になった体験が重ねられ説得力充分だ。戦後、マスコミが法にはない自己規制を敷き、強化する方向へ歩んできたことへの疑問と危機感が切実に迫ってくる。

過去に何を考えていたか思い出せなくとも、ある歌を耳にしていたときの生理や感覚は記憶にあるかもしれない、というあとがきの一節からも、この本は「歌」を通した作者本人のドキュメンタリーと言えるかもしれない。

「ぼくの歌・みんなの歌」

*森　達也 著

講談社 1,995円

＊もり・たつや　1956年広島県生まれ。映画監督。ドキュメンタリー作家。著書に「放送禁止歌」など。

防衛策の必要性増し復刊

「ストレス『善玉』論」

*中沢正夫 著

岩波現代文庫 1,050円

この書は二十一年前に出版され、新たに文庫で復刊された。なぜ今さら？　読むに従いその理由が分かってくる。

精神科医である著者は言う。ストレスについて書くことも、ストレスに悩む人を診断することもストレスであり、ときに苦痛であると。そんな彼が目指すのは、書いても読んでもリラックスできる「ストレスの本」だ。そこで、あまり知られなかった精神科医の日常やタブー視されてきた禁句を引き合いに、軽みのある文体でストレスの正体と対応策を解き明かす。

そもそも「正常な心」とは何か。著者は、『矛盾した考えや感情が同居できること』と定義する。そこから求められるのは「同義性に耐えうる力」であり、「ストレス」も、本来、生きがいと苦しみが背中合わせで、だからこそ厄介なのだ。

つまり、一概に「悪」でない以上、むしろストレス下で何らかの症状を呈す人の方が正常ということになる。ただし、「ストレスがある」ことと「ありすぎる」ことは全く違うと予防線も張る。通勤途中に頻発する下痢や、たった一度の転居が人生を狂わせていく話など身につまされるものも多い。

また、ストレスの最大の発生源はどこか。著者は職場に焦点を絞る。胸躍る希望の半面、深く傷つく挫折もそこにあるということだ。よって医療機関と連携したメンタルヘルスの対応が急務だが、ここ十数年、政府からの補助は減り続け、医師の多忙化、人手不足、患者の重症化、高齢化、チームワークの崩壊と現場は決壊寸前と訴える。

そんな時代を予知していたかのように「個人防衛策」に重点を当て論じたこの著は、皮肉にも一層、必要性を増したということになる。再版に当たり加筆された「職場の同僚が潰れたとき、復帰してくるとき」は具体的で、すぐにでも役立つこと請け合いだ。「安心のための十ケ条」の「いつも悪い結果を予測しておく」や「配偶者以外に愚痴を言える相手を二人つくる」など、なるほどと納得しつつ、どこか気が楽になる本である。

＊なかざわ・まさお　1937年群馬県生まれ。精神科医。代々木病院嘱託医。

過酷な塀の中の「生」淡々と

「故郷は近くにて」

*関　敬 著

熊日出版 2,000円

どのような過酷な状況に置かれようとも課され続けること、それは「生きる」ということだ。また、矛盾したことではあるが、ときとしてその「生」の輝きや純度は、厳しい環境であるほどに増すこともある。表紙の写真が示すように、この書には「声高な言葉」は出てこない。あくまで「一人の生活者」が日常の視点から、生い立ちや現在の暮らしの風景を静かに、淡々と綴(つづ)っていく。

巻頭、胸をうつのは礼拝堂に安置された阿弥陀像を何度も訪ね、堕胎の道を選ばざるをえなかった我が子への懺悔(ざんげ)と自分を許すことのできぬ苦悶を訴える「告白」の章である。カバーをはがすとそこには、今も面影を重ね大事にされる人形の写真が言葉を失わせる。

「自分が健康でなければ女房の世話もできないし、また女房をわずらわせることも心せねばと思う」「あと数年で世に言う金婚を迎えるが、この年齢になれば『妻、女房』と言うより『連れ合い』という言葉が似合う気がする」そんな絶望と隣り合わせの暮らしの中で随所に散りばめられるのは作者の切なる妻への思いだ。六十四年もの間、『あつい壁』に封じ込まれてきた現実の重みが男女の絆をより崇高なものへと結実させたとも言える。

「ある時期ですけど、『悟り』のような気持ちになったなあ、というのは覚えています」

幾度となく出てくる「感謝」という言葉について筆者に尋ねたことがある。特効薬プロミンの存在を知りつつ「らい予防法」強化を主張した「三園長証言」や国のこれまでの政策に対する強い「告発」のくだりもなく、それどころか法廃止へようやく動きだした十数年前の世情を含め、手厚い「療養」への「感謝」を述べる作者にどうしても聞いてみたかった。人智を越えた境地を希求せずには過ごすことのできなかった日々。そこにこそ「生」の真実はあるのだ。

理不尽な「塀」に囲まれた「世界」で、懸命に誠実に生きるとはどういうことかを、この一冊は、その「塀」をつくった私たちに教えてくれる。

＊せき・けい　1928年熊本県生まれ。43年国立ハンセン病療養所菊池恵楓園に入所。

言葉で乗り越える差別の苦悩

人はどのようにして被差別の状況を乗り越えていくのか。いやそもそもそれは可能か。この切実な問いに答えてくれる書があらわれた。

作者は一九二七年、広島県の被差別部落に生まれた。戦後の解放運動とともに広がった識字学級で文字を学び、雑誌への投稿を始め、初入選したのは六十二歳のときである。それから汲めども尽きぬ思いを書きつづけてきた。

彼女は三歳で孤児となり叔母の養女になる。小学二年生のとき、トラホームで目を患った彼女のため「三度食うもな、二度にへらしてもええ」と医療費を捻出する養父母に報いようと、病院までの二時間の道のりを電車に乗らず歩くことを選ぶ。貧しさを幼いながらに肌で感じ、想像力をバネにした確かなやさしさがそこにある。それは親になった彼女が鉄屑拾いをしたとき、幼い手に釘をにぎりしめ差し出す息子へと受け継がれていく。就職や、結婚の場で、彼女は多くの差別にあうが、ときに励まし、力になってくれたのが、同じく厳しい状況に置かれていた在日の人たちであったことも見逃せない。

「私の生まれた日」

*井上ハツミ 著

解放出版社 1,365円

最終章の『生命の重さ』は胸を打つ。作者はかつて大学生と恋に落ち、私生児を出産した。栄養失調で生まれたその子はすぐに重い病気にかかる。家柄や血統が穢れていると一方的に吐き捨て離れて行った男から、ほとぼりが冷めたころ、そばで暮らすことを誘われるが、彼女はきっぱりと断る。わずか一歳で死んでしまう我が子。もの言わぬ亡骸を通して、部落差別によって憎しみ合わねばならなかった自分たち世代の苦悩を切々と訴える。とかく押し付けがましくなる経験譚は、自戒を込めた厳しさとしなやかな感性ゆえ、情緒にもたれることはない。

細かな記憶が木彫りのような簡素な筆致で表現され、人に伝えるだけでない、自己を解放し新しい可能性へ切り開いていく「言葉本来の力」を知らせてくれる。

読了後、重たさ以上の清涼感が吹き込んでくる稀有な書だ。

*いのうえ・はつみ　1927年広島県生まれ。第30回部落解放文学賞受賞。

鼎談に映る「日本人」とは何か

そろそろ入試の季節だ。この時期になると、どれだけの生徒が理不尽な振り分けで苦しんでいるのかと胸が痛くなる。そんな循環を断ち切るべく、民間人校長をはじめ、「ゆとり教育」の推進者、いじめ、学力、教科書検定、法改正のエキスパートによる鼎談を一冊にしたのが本書だ。

そもそも「ゆとり教育」は、八〇年代に激しくなった対外貿易摩擦がきっかけだという。良質の製品を安値で提供する日本の労働の根っこに、過剰な長時間労働の実態を見た外国が変革を要求した。それによりまず教師など公務員が週休二日となり、カリキュラムや学級編成は文科省の大枠内であれば校長の裁量で自由に変えられるようになった。出発はどうあれ、校長の権限強化をプラス面と受け止め、「よのなか」科を軸に教育実践を行ったのが藤原和博氏である。

だが宮台真司は言う。多くの校長は権限を管理強化に使い、保守的で昔ながらのスタイルを続けるだけだった。改善すべき点はわかっているのに手をつけず、反対にせっかくの良い面はなし崩し的に否定する一貫性のなさ。つまるところ六つの鼎談から見えてくるのは、そんな「日本人」とは何かということだ。

いじめの被害者救済もまったなしだ。「自殺」という形でメッセージを送るのは、圧倒的集団の中で個が無力化されている証拠だとゲストの内田朝雄氏は指摘する。そのために学校の生活空間自体を変え、シカトやクスクス笑いといったコミュニケーション操作系のいじめを無意味化することが急務だと。それに対し、積極的な司法と警察導入により即効性を導こうとする宮台。忌憚ない議論が進められていく。

「あとがき」でその理由がわかった。これは広告をとらず会費のみで運営されているインターネット放送『ビデオニュース・ドットコム』（神保哲生代表）を活字化したものなのだ。

既に新しい媒体で深い議論が始まっている。なるほどと納得しつつ、勇気をもらえる一冊だ。

「教育をめぐる虚構と真実」

*神保哲生 ら 著

春秋社 1,890円

＊じんぼう・てつお　1961年東京都生まれ。ビデオジャーナリスト。

「負け組」にエール送る人生論

この著は、安保闘争の挫折以後、経済学に社会学的方法を導入し、一貫して「伝統（母語を基盤とする民族の背負ってきた歴史）」と「公共性（道徳をもとにした共通価値観）」の重要性を問うてきた著者が、コミュニティや市場など、戦後最も深刻な危機状況に曝される若者へ訴える人生論だ。

まず著者は、現代を経済にあってはマモニズム（拝金主義）、政治はポピュラリズム（人気主義）、文化はピュエリリズム（幼稚主義）とし、大衆が表層的に動く社会の負の側面が凌駕する実態を批判する。

そんな中、「負け組であることに誇りを持て」とエールを送る。平等主義が得てして画一主義に陥る危険性を上げ、「平等の理想と格差の現実」の間で、いかにして個人が社会価値を見出しバランスをとるかが鍵と説く。その根底には、そもそも社会が相互扶助と排除の両面があり、「負け組」という限界状態に立つことで金銭では購入できない本来、人間の持つ普遍的な価値（真、善、美）に目覚めるというのだ。

しかも著者は具体的政策の提言も忘れない。社会は市場化不可能な財としての「公共活動」を活発にし、ローリターン（低収益）、ローリスク（低危険）の資金利用を活性化させ、ローレヴニュウ（低収入）ではあるがハイパブリックネス（高公共性）の雇用を増やすべきだとする。

『自律せる地域に自立した人間が棲む』『人の心奥には祖国が横たわっている』『集団帰属なければ自己実現なし』など少々古めかしい小見出しを見ると、戦後六十四年、日本において保守的彩りを持つ思想を貫くことは、意外に困難だったのではないかと思えてくる。なぜなら知の世界でさえ、商品開発と同じく常に新しさが要求され、船来もののファッション（流行）のごとく意匠化された記号が大量消費されてきたからだ。

揺れ動く時代だからこそ、使い古されてきた言葉を再度咀嚼し、「日本人」であることの意味と可能性を考えてみるのも悪くないのかもしれない。

「陥没する世界のなかでの『しあわせ』論」

*西部　邁 著

ジョルダン 1,575円

*にしべ・すすむ　1939年北海道生まれ。評論家。著書に「経済倫理学序説」「生まじめな戯れ」など。

「労働」瓦解の実態 赤裸々に告発

多くの人にとり、「労働」は人生で大きな比重をしめ、できれば最大限に能力を生かし、安定した収入の下、安心して暮らしたいと願っている。その「労働」の根幹が今、崩壊しつつある。

この書は、派遣業界に勤め、つぶさに現場を見てきた著者が、その瓦解の実態を赤裸々に告発している。

一九九九年の派遣法改正により、派遣できる業務は一定の職種を除き、原則として自由化した。それは法を後ろ盾に政府によって労使間や労働者個々の間に広範囲にわたり「差別構造」が導入され、企業優先の効率化が加速した始まりでもあった。

どんなに気に入った職場でも三年で再契約に追い込まれ、正社員に意見を言える空気はほぼないに等しい。正社員も日頃のストレスの発散とばかりに罵声と叱責を飛ばし、呼称には個人名ではなく、「○○派遣会社の人」を使う。必然的に双方の不信は強まり、弱い立場の派遣社員は辞めていく。派遣会社も初めからその事態は想定し、実際に必要な数より多く募集する。結果、人材の質等の低下が招かれ、個々の生活環境は徐々に荒んでいく。万引きや無銭飲食、寮内での薬物乱用や盗難、喧嘩、派遣会社の管理職への暴力、突然死、自殺……。それらが確実に増えているのだ。

労災補てん保険は、現場で事故が起きたとき、労災の対象にならなかった場合に備え加入する保険だが、掛金は本人が全額支払っているにもかかわらず、保険金の半額は会社に入るようになっている。病死した社員の遺族を前に、上司から保険の事実を口止めされた著者は苦悩する。勿論、そんな過酷な中でも地道に実績を重ね、働き続ける派遣社員や、良心的に世話をする著者のような存在は救いとも言えるのだが。

かつての治安維持法しかり、今年から導入された裁判員法に基づく裁判員制度もそうだが、これまで歴史の分岐点には、必ずと言っていいほど新たな法律の制定や改正が絡んできた。「派遣法」もその一つだろうが、僅か数行の法律の文言がかくも生活を根こそぎ変えてしまうのかと、想像を超えた現実の怖さを思い知らされる一冊だ。

「派遣のウラの真実」

*渡辺雅紀 著

宝島社 680円

*わたなべ・まさき　1963年北海道生まれ。30代後半から一時期、派遣業で管理職を経験。

「裁く」ことの意味 切実に問う

人は人を裁くことができるのか。まして裁判官でない素人が。本書は米国であった有名なスコット・ピーターソン事件（夫による妻・胎児殺し。有罪を証明する証拠は何一つなく、状況証拠のみで死刑が確定した）裁判の経過を十二人の陪審員や関係者の証言をもとに忠実に迫ったノンフィクションだ。

陪審員選びから評決までの約半年を十六章で細かく分け、制度内容も一目でわかるように詳述されている。先ごろ、裁判員制度が始まり、その実態に不安を持つ者にとっては格好の参考書とも言えるだろう。

大衆の注目する事件ともなればそこにはマスコミや有名弁護士が登場し、あたかも法廷は「劇場」のように展開していく。特に、どちらかと言えば被告寄りだった三人の陪審員が途中解任され、急速に有罪へ傾いていく過程や、常に陪審員の行動（メモの有無、居眠り、閉廷後の雑談内容など）をチェックする内部密告者の存在は不気味ですらある。

また、陪審員のほとんどが、事件の詳細を写真や音声、フィルムなどで繰り返し確認するためＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）に悩まされる実態も浮き彫りにされる。しかも、過酷な「守秘義務」のため悩みを誰にも相談できず、十分な公的アフターケアの制度も整っていないのが現状だ。

殺人事件の陪審員になることと戦争で兵士として戦うことは、どちらも人間の生死を決める点で共通し、自身の人間性を抑圧しかねないという、ある陪審コンサルタントの言葉は重い。

そんな中、評決が誰にどう影響するかは一切考えず、ただ被告の罪のみを冷静に見つめることを言い聞かせ、涙しながら量刑の判決を下す陪審員たちの姿は「死刑」の是非も含め、「裁く」ことの意味を切実に問うてくる。

かつて免田栄氏から、日本の裁判は「情」で動きやすいと聞いたことがある。法廷の劇場化が今後どのような影響をもたらすのか。

周囲の「感情」や「雰囲気」に左右されぬ客観性の保持も含め、「自分ならどうするか」絶えず自問せずにはいられない貴重な一冊だ。

「私たちが死刑評決しました。」

*フランク・スワートローほか 著
上田勢子 訳

ランダムハウス講談社 1,890円

＊Frank Swertlow　米国の多くの雑誌で活躍するジャーナリスト。

平和革命へ政治参画意識を

「民主党 波瀾の航海」

*鎌田　慧 著

アストラ 1,785円

これは日本の「痛憤の現場」を歩きルポしてきた著者が新政権への思いを辛口の提言で綴った叫びの書だ。一読すると、所信表明演説における鳩山首相の「無血平成維新」と称した与野党逆転劇があながちオーバーでなく、戦後築き上げられた民主主義が首の皮一枚でつながっていたことを痛感する。

最低投票率の規定のない国民投票法成立や教育基本法前文の「平和」から「正義」への文言変更、事態に応じて武器使用を認める自衛隊法の項目追加、業種を選ばぬ労働者派遣法改悪、年金天引きの後期高齢者医療制度…。これらを著者は十一章に分け細かく分析する。そこから自公政権の国民不在体質を責めつつ、民主党にエールを送るだけでなく、日頃から国民自らが政治への参画意識を持ち、責任をもってチェックをしていく必要性を訴える。重要なのは「政権交代」という単なる表看板の据え替えではなく、国民が政治へのリテラシー（活用能力）を身につけ、方向やプロセスの決定権は自分たちが握っているという実感を取り戻していくことなのだ。

さらに、とかく経済不況を主因として語られる時代の閉塞感や個々の不安感の根っこが、けっしてそれだけでないことも見えてくる。その最たるものが旧政権が進めてきた言論統制だ。マスコミへの圧力でつくりだされる偏向した報道や、ビラ配布の規制、勇気あるジャーナリストの取材源秘匿に対する司法からの攻撃等、枚挙に暇がない。

また、著者の新政権の一番の危惧としては原発政策が上がる。燃料電池やバイオマスなど新エネルギーの力強いアピールに比し、原発についてのマニフェストへの表記の少なさに、かつて使用済み核燃料の再処理工場（青森県六ケ所村）の問題点を浮き彫りにした経験から、原発容認の匂いを看破する。現時点では表にこそ出ていないが、軍隊との交戦権を否定する憲法九条二項の削減を狙っているという指摘も聞き逃せない。

帯文の「平和革命に進め」これが本書の主眼のようだ。権力に阿らぬ著者ゆえに説得力ある一冊と言える。

*かまた・さとし　1938年青森県生まれ。ルポライター。

新解釈で歴史の常識にメス

「古事記」を例にとるまでもなく、一国の興りを著した歴史書は時代とともに色合いを変え、少数の権力者や知識人により新たな解釈が加えられてきた。これは大衆の意識や生活感覚と融和させ、治世するための常道だ。

この書は、いわばこの常識とも言える歴史形成に、敢えて古典的文献の検証という地道な方法でメスをふるった。作者をそこまで突き動かしたものは何か。研究対象がホロコースト（大量虐殺）を体験したユダヤ人であり、シオニズムという単一なアイデンティティーの強制により、現在も拡充が進むイスラエルとなれば頷ける。

そもそも「国民」と「国家」のどちらが先に誕生したのか。第一章で作者が追い求めたテーマだ。古代からの歴史性の中、民衆の主権と平等の希求は「国家」という枠組みを徐々に濃くしてきた。政治への参加意識を強く持つことは、当然その対象（枠）を明確に掴むことだ。イスラエルの場合、個々の主体の根幹に旧約聖書の教えがあり、「選ばれし民」＝「民族」あるいは「種族」としての優位性を持たせることで、集団意識を強力にした。

が、果たしてそうか。本書は、第二章から本領を発揮する。ローマによるエルサレムの神殿破壊後、追放の記録等がないことから、ユダヤ人の多くは居残り、キリスト教やイスラム教へ改宗しながら生き続けたとする。つまり「離散」は存在せず、パレスチナアラブ人こそ、遠きユダヤ人の先祖の可能性があるという論には驚かされる。

さらに紀元八世紀から一三世紀、カスピ海から黒海沿岸に栄えたユダヤ教に改宗した国家、ハザール王国の存在も見逃せない。最終的に蒙古軍に敗れ消滅するが、その末裔がヨーロッパ地域のユダヤ人社会を形成したとする説は、「種」でなく、あくまで「宗教」的存在として繋がってきたユダヤ人像が浮き彫りになってくる。

いずれにせよこの書がイスラエルで初出版され、ベストセラーを続けたことは驚異だ。とかく負の側面が強調されがちなイスラエル社会のリベラルな面として記憶するに値するだろう。

「ユダヤ人の起源」

*シュロモー・サンド 著
高橋武智・佐々木康之・木村高子 訳

浩樹気社 3,990円

*Shlomo Sand　1948年オーストリア生まれ。テルアビブ大で現代ヨーロッパ史を教える。

「戦争裁判」の著者 本田タネさんと会う

熊本市神水の本田タネさん(87)が『戦争裁判』をこのほど自費出版した。五十五年前にB級戦犯として刑死した夫の戦争裁判への疑問を追及した書だ。小説家の宮本誠一さん(41)に、同書を読んで著者と語らった感想を寄せてもらった。

†

別れ際、「私の歩んだ道しるべ」とつづけ字でしたためられた小箱から彼女がいとおしむように取りだしたものは、看護婦合格証、日中戦争での従軍看護への金券、国立病院採用辞令、さらに数枚の陸軍病院時代の写真などだった。

それはまさに戦中から戦後の混乱とは対照的に、色白いふっくらした顔立ちに気丈なまなざしをひらきつつ、どこか少女のあどけなさを残している。そんな静かなモノクロの世界にたたずむ一人の女性に、その後、昭和、平成にかけ長いたたかいが待っていようとは誰が想像できただろう。

「B級戦犯の妻 ふたすじの道」

*本田タネ 著

「どうして、こげん強うなったつでしょうね。昔はやさしか性格だったとに」

そう屈託なく笑みをこぼす表情からは、『戦犯』の妻」として生きてきた苦悩と重みをすぐによみとることはむずかしい。だが、終始一貫した過去の日づけや記憶の正確さに、半世紀以上前の出来事がいつのまにか「現在」と逆転し、ある歴史の一点が浮き上がっては、〈謎〉をもってつつみだす。

淡々と語りだしたその姿に、「お迎えをいただいた時点が、私にとっての終戦」と、前著『B級戦犯の妻 ふたすじの道』の最終行で言いきった人にふさわしい強い意志のほとばしりを感じつつ、人間の真の「やさしさ」とはなにかを考えさせられる思いがした。

前著にはタネさんの夫、始さんとの結婚生活や始さんが戦犯容疑となり、刑に処せられるまでの様子が自伝ふうに書かれている。県内外から多くの反響があったが、中には心ない声もあった。

「戦犯になったのは、悪いことをしたけんしょうがなかでしょう」。あるいは名も告げず電話口で「ご主人は何人殺しなはったとですか。一人ぐらいじゃ死刑にならんですけん」—

そう吐きすてるように言った人もいたという。また周囲の戦後生まれの人に配っても、そのあまりの無関心さに驚くことも多かった。

それらいくつかのことにつき動かされ、再びペンをとった。それが今回の『戦争裁判』である。

連合軍は終戦と同時に「戦犯調査局」なるものを設け、一斉に戦争犯罪捜査を開始する。A級は戦争を計画、準備、謀議した者であり、B級がその命令者、C級が実行者である。刑死者はA級の七名に対し、B・C級は九百二十七名にものぼる。

真実を求める人間の姿 歴史の欺瞞解き明かす

始さんもB級戦犯として昭和二十三年、絞首刑となった。起訴理由は、俘虜収容所任務時代の俘虜虐待である。だがタネさんはその起訴から裁判を経る中で、多くの疑問点にいきあたる。

打電の期日どおり横浜まで行ったのに、すでに一日早く、証人や肉親不在のまま裁判が終わっていたのはなぜか。検事側の証人に当時の収容所所長がおり、夫の上司であった班長が被告側証人としての出廷を辞退したことも不可解だった。

その疑問は前著出版後、五十数年ぶりに「墓にまいらせてください」と、何かにとりつかれたように突然にあらわれた班長が、苦渋の表情で「あのときは所長の話にのったばかりに、証人になれませんでした」と頭を下げたことで決定的となる。

そのことはタネさんが私に直接に語ったのだが、班長が亡くなっていることもあって、本著にはその詳細は書かれていない。

いよいよ真実は手のとどくところへきた。起訴のもととなる告訴は、いったい誰の名でなされたか。タネさんは八十路を半ばすぎた今、この著を記したばかりか、元所長の真偽を明かそうと意欲をもやしている。

これまで戦争は観念でとらえられ、一般論で語られがちだった。だがここにあるのは肌身で感じた疑問をすてさることなく愚直なまでに真実を求め生きてきた人間の姿である。日常の等身大の視点を失わない、タネさんという一人の女性ならではの感覚とも言える。

「個」が戦争でどのように打ち砕かれるか。そして、ひとたび失った尊厳をとりもどすことが、どんなに困難で苦しみにみちた道のりか。歴史の欺瞞へ垂直にふり下ろされた文字から、ひしひしと伝わってくるのだ。

※『戦争裁判』は熊日情報文化センター制作、
952円

＊ほんだ・たね　1916年熊本市生まれ。看護婦として戦前は熊本陸軍病院健軍臨時分院など、戦後は国立熊本病院に勤務。著書に「B級戦犯の妻　ふたすじの道」がある。

「浜田知明展―版画と彫刻による人間の探究」に寄せて

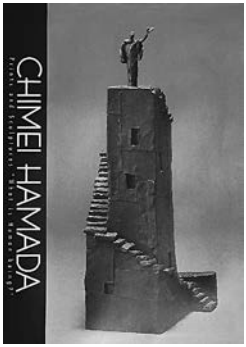
「作品を見たとき、それに対し、なにか気にかかることがあれば、作者に率直に問うべきだ。そこから新たな関係が生まれ、その再生こそが重要である」

作者本人への五年にわたる詳細なインタビューが並べられたという、この展覧会のコンセプトを知ったとき浮かんできたものは、今は亡き陶芸家が私に語ったこんな言葉だった。

ある造形物を見たとき、感覚的に受け取る部分と、どうしても奥の意図を観念的に探り、説明を要求してしまう部分とが交錯しあう。見たままに感じるだけなら、むしろその両者の葛藤は避けられ、深まる機会を失っていることになりはしないか。陶芸家の言葉は頷ける点もあり、しかし半面疑問としても残った。

「問う」「説明する」とは作品をあまりに「思想」的にとらえすぎる危険も意味するからだ。「造形美術は感じるものであって、言葉で説明するものではない」と浜田氏は述べる。

「浜田知明―版画と彫刻による人間の探究」



発行　熊本県立美術館

だが、あえてそれを破り、この試みをしたのはなぜか。作品展を見にいこうと考えた理由は、考えつづけていた問いへのヒントが隠されていると思ったからである。

美術館で直接、作品群を見ながら感じたこと、それは、そこに添えられたインタビューの新鮮さと、徐々にイメージを制限してくる圧迫感だった。次第にいい加減に読みだし、作品を自由に自分なりに受けとることに重点を置きだしてしまう。俄にそこには無限の空間が広がり、作品そのものが作者を超え語りだす。ところが私の意識は混乱してきた。それでも浜田氏の作品は、作者の言葉にふり向かせてしまう。それはなぜか。一言でいえば、氏の作品と人間の存在を原形にまで掘り下げたモチーフとシンプルさとにむすびついた、簡潔でありながら的確に自己意識をとらえる言葉の真実性に答えはあるように思う。

作品展だけでなく、図録にも、実に二百二十点に及ぶ作品と作者のコメントが収録されている。「涙が流れているんですが、これで絵が甘くなるんじゃないかと随分迷いました。何日も。どちらかに決まったら腐食しようと思って。でもポ

ロリと一つ置きたかったんです」。『初年兵哀歌（歩哨）』をめぐる一節である。制作過程を明らかにすることは、作品の背後に潜んだ謎の濃度を薄くする可能性がある。それを承知で随所に生の言葉が散りばめられているのは、無駄のない骨格を持つ作品への作者の自信と飾らない人柄からも生まれているのだろう。

さらに、言語と造形との関係をまざまざと見せつけるのは、例えば『ボタン（A）』だ。

最初のボタンを布をかぶせられた男が押し、その人間の体内を通過するボタンを素顔の男、その後ろにかなり大きな体格をした男が押し、その回路の先は茸雲が描かれている。ある程度年齢を重ねた者なら、これまで生きた社会性の中で説明をつけてしまう。だが子ども、というか、まだ言葉をもたぬ人間が見たらどうか。もしかすると皆ふざけてガッツポーズをとっている姿と映るかもしれない。そこに、「結局原水爆などというのは何百万のキャンバスに描いたって絵にならないわけで、最後に行き着いたところがこういうこと」という作者の飄々とした言説を知ることで、改めて芸術の存在意味に立ち返らせるのだ。この発想の意外性、核心との根底での出会いこそ、あの陶芸家の言った再生の場ではなかろうか。

肉声が生む核心との出会い

作品と作者の肉声によって、作品を目の前にした人間の個々の内部に、より深い会話が誕生する。そんな創造的な場をつくりだそうという、今回の作品展の試みは大きいと思う。

※「浜田知明展」は二〇〇一年十月三日から十一月十一日まで熊本市二の丸の県立美術館本館で行われました。

きょうの発言

熊本日日新聞〈1999年4月6日〜6月29日〉

きょうの発言／1999年4月6日

「する」自由と「しない」自由

とき既に出発の季節である。三月十五日、小学校教諭時代の教え子が志望高校合格の知らせをもって夢屋にやってきてくれた。強風と長雨が去った後、暗雲がうそのように明けきり、清澄な響きが透徹した快晴の日だ。

風はやがて弱まる。たとえそれが強い勢力をもった台風だとしても。県内にも六年前、巨大な台風が上陸（発生）した。名前は個人学習診断テスト。あいさつに来たその子は小学四年から中学三年まで一貫して拒否し続けた。内訳はこうだ。小学では本人の意志により白紙状態で提出、中学では一年目が保護者が学校へ赴き、担任と校長を前に、結果を外部へ出さないようその理由と併せ訴えた。このとき相手のガードは固く、根気と時間が必要とされた。二年では一年で実行していたため、同じ気持ちである旨を再び手紙で伝え、比較的早くに認められ、三年になると、学校側の方から学年全員にマークシートを協議会へ提出せず校内だけの資料とすることを公約してきた。つまり彼は、実に六年間をとおして保護者と『学力』という個人のプライバシーを守り続けたことになる。

果たして診断テストとは何であったのか。鳴り物入りで始まった「個性」を伸ばし「荒れ」をも治めるという万能のふれこみをもった一斉テストという台風は今、県内を席巻（せっけん）したあげく勢力を落とし自然消滅寸前にある。賛否どちらにせよ、多くの心を傷つけられた児童生徒と保護者はこの現実をどう見ているのか。疲へいする教育現場だけが、その透かし彫りの奥に浮かんでくるようだ。

「おかしいと思ったから、やらなかっただけ」とその子は言う。「やる」自由と「やらない」自由。歴史的事象はいつもこの両者間で揺れ動く。

どちらを選ぶ者にとっても踏み絵としてだけは機能してはならない、そう切に思っている。

きょうの発言／1999年4月13日

絶望の炎と希望の火

三月末、二重の峠で野焼きと遭遇した。巨木が倒されていくようなすさまじい音がする。燃える音ではない。波が岸壁に当たり砕け、飛沫となって鼓膜を引き裂く響きにも似ている。煙はもうもうと立ち上り、とぐろを巻き快晴の空へ向かって上昇していく。さらけだされた黒い地肌を見ていると、実際には知らない戦場を想像してしまうのは私だけだろうか。

それから数日後、紙面に大きくオレンジ色の炎の写真が載った。

『NATO　ユーゴ空爆』・アルバニア系難民たちの悲しみの表情が言葉を失わせる。数限りなく続く戦禍に対し無力感だけが募っていく。野焼きの炎とは全く違う。そこには生命の絶えた闇の中に虚無的にうなりをあげ、地を焼く破壊の臭いがあるだけだ。私は自らの安易なイメージの連想を恥じ、二つの炎の存在を思った。「死」と「再生」の……。

「私は祖国をこんな絶望的な戦いに引きずりこんだ軍部をにくんでいたが、私が彼らを阻止すべく何事も賭さなかった以上、彼らによって与えられた運命に抗議する権利はないと思われた」。大岡昇平は『俘虜記』の中でそう述べている。

彼は人間は自分が納得していない行為にも、ときとして拒否しない（「できない」ではない）形をとれる存在であり、そこには日常の意識と行動が深くかかわっていることを身をもって痛感した。戦後はその体験をもとに一貫した作家態度をとり続ける。

ユーゴでは兵士になることを避け姿を隠した若者たちがかなりいたという。

「いざとなったら反対する」とだれもがよく口にする。だが人は物理的条件よりむしろ、自らがこさえた、その現状そのものから派生する自己意識をどう超えられるかが大きな鍵なのだ。

人間は「点」として生きているのではなく「線」そのものであり、生きる方向もまた連続しているのである。

きょうの発言／1999年4月20日

「個」のない場所のいじめ

春、新入生はどうしているだろうか。かつて『ちびまる子ちゃん』は私たち三十代にとって幼い日の情緒を思い起こさせ、ノスタルジーを醸しだす作品だった。現在もその良さは残してはいるが、気になるキャラクターもいる。「ブー太郎」である。

話し言葉の最後に必ず「ブー」をつける。ほかの登場人物たちもおのおのに個性は豊かだ。しかしブー太郎と明らかに違う点、それは、家族すべてが豚をイメージする表情で描かれ、特異な語尾を繰り返す者として描かれているところである。

作者がなぜこのような「家族」をつくったのか、その意図を良心的に考えてみる。

豚のイメージアップ？　臭い、汚い、太っているという代名詞に使われがちな生き物を大胆に漫画に投影することで既成概念を打ち破りたかった…。しかし周囲の子たちに明らかに作者がしのびこませているものは、そこからは離れてこの家族に対する奇異から生まれる興味、侮蔑（ぶべつ）である。

ある日の放送では、母親が豚の顔までプリントした家族全員分のセーターを編み、それを皆で着るという場面があった。

しかもまる子に「家族でそれを着るってことは、いよいよ自分たちがブタだって認めたことになるね」とこわごわ言わせている。

クラスで一人の子がいじめを受けるとき、必ず地域の中ではその子の家族にも厳しい視線が向けられているケースが多い。子への話題とは、狭い世間では家族へのまなざしと同格である。一対一の場合でも両者ともがほかの子たちから疎外されていることが多い。

いじめの構造を壊そうと思えば、教師や大人たちは当事者以外の「絶対的多数」であるその外部や地域、学校を構成する他者と互角に向き合っていく覚悟が必要となる。

「個」のない場所にはしょせんは、〝「個」のないいじめ〟しか存在しないのだから。

きょうの発言／1999年4月27日

四体満足でも「不満足」？

『五体不満足』（乙武洋匡著）がよく読まれている。これまで福祉先進地、欧州の翻訳本でしか味わったことのない障がい者本人の力強い感性とユーモア、周囲の理解ある姿と成長が説教くさくなく、魅力ある人間の幅をもって伝わってくる。

だが私の場合、ページをめくるごとにその喜びは次第に別のものへとかわっていった。各々に異なる障がいには苦しみも喜びもあると思う。だが、知的な面で障がいがないということは、条件が整えば、ある程度の地域生活が可能だということ。たとえ五体のうち四体がすべて「不満足」だとしても…。

夢屋を利用する一人の青年はA2の自閉症である。一見したところ肉体はすべて「満足」の状態にある。だが彼は、現在更生施設に籍を置き一年の大半を暮らしている。

今春「強度行動障害」という特別手当が県から支給される立場となった。もちろんそれは施設がしかるべき処置をとるための費用となる。ほかの子より手がかかり、パニックの頻度と度合いが高い特定の子たちの療育を援助するというのがその主な目的だ。

かつて一貫した地域での統合教育のもと小中を地元普通学校に学び、高校では特別聴講生という立場で一人の加配教師を獲得、全日程のカリキュラム参加まで実現した彼。その後一年間、仲間たちと汗水流しながら夢屋設立に奔走、徐々に回復し再び地域で生きようとした矢先、だれも予想していなかった長期の激しい荒れと混乱が彼を襲ってきたのである。外的要因は早期に保護者、施設ともに話し合い改善に向け進められている。

だが自閉症とは結局、いまだ謎（なぞ）に満ちた障害なのである。その最たる特徴である〝こだわり〟がなぜ生まれるのか、その根幹は解明されていない。

四体満足でも不満足か。残る「一体」の知的側面の比重は大きい。

きょうの発言／1999年5月11日

つくり手と受け手

「最近の映画は、監督自身が自分の才能を誇示するためにつくっているように思う。見ていてもこちらはそこまで付き合ってはいられないという気持ちになってくる」ある席で、福島次郎氏（芥川賞候補作家）が私に語った言葉だ。

「昔は、映画や芝居もそこに人生を学びに行った。だが今は、何かを得るではなく、何もかもを忘れるために出かけているような気がする」

そもそも近ごろ、新聞小説を読む読まないから始まった会話だった。もちろんこれは、極論的考えをあえて氏が語っているのだが、確かに大なり小なりどんな創作も、才能や資質との闘いの末、生まれるわけで、作品に作者の無意識が入り込めばその要素は生じてくる。問題はそれらの比重、バランスだろう。「なぜこの作品をつくるのか」自問自答しながら、意識的に排除すべきものは排除し、加えるものは加えていく以外ない。その結果、作者本人の才能開示の傾向が強いとなると、文化を発信する側もそのような人間が増えているとしか言いようがないわけだ。

「映画」をほかの言葉に換えてみる。最近の料理は、教育は、絵は…、コック自身が、教師自身が、画家自身が…、自分の才能を示すために、料理を、授業を、絵を…つくっている。食べる客は、受ける生徒は、見る者は…、そこまで付き合ってはいられない気分になる。

「発信する側」と「受ける側」、いったいどちらが主役なのか。

エンターテインメントとは顧客本位の立場から生まれた言葉だ。ワクワクするほど楽しく、しかもためになる。受ける側はいつもわがままである。だがそんな受け手が、忘れるため、ただ日常の時間と空間を一瞬でも消し去るためのものを求めている。

〝つくり手〟と〝受け手〟との奇妙な関係だ。本来両者すべきことを喪失しかかっているのだろうか。この答えさえ、忘却の対象にある。

きょうの発言／1999年5月18日

「誤爆」と「空爆」の隙間

武力により他国へ主義主張を通そうとする国の大統領が、自国の高校で起きた乱射事件に対して悲しみを表し、銃社会への苦しみを訴える。そんな空疎で何とも説得力のない図式の中で私たちは生きている。

これが現実なのだと自分を納得させつつも、一体どこからどこまでが実際の出来事で、どこからが虚偽なのか、その線引きが困難になってきているのは私だけだろうか。

「誤爆」この言葉の奥には多くの事柄が隠されている気がする。

よくよく考えてみれば、私たちは大小さまざまの「誤爆」と称される、その実、意識的で組織ぐるみの「作為」の中で生きていると言っていい。パイロットが指示に従いミサイルのボタンを押し、狙い通りビルや列車の破壊を実行したこと、それは確かだ。故意か偶然かそこが別のものとスライドし、目的の人々や物体ではなかったわけである。正確に行えば「空爆」と言われ、そうでなかったら「誤爆」。もしかするとその事実を知らされても一番、夢と現実が錯綜（さくそう）した気分になっていたのは任務を無事決行し帰還したパイロット自身だったかもしれない。彼にしてみれば、与えられた命令はほぼ間違いなく達成されていたのだから。

今後、私たちはこのようなシステムの誤作動も含めた、しかし確実な「作為」の中で命を奪われていくような気がして仕方がない。

犠牲になった側も、明確な「作為」の中で殺されたことは事実であり、誤った方も破壊と殺戮を目的としそれを遂行したこと、それはなんら変わることのない真実なのである。両者の間で「誤爆」は全く成立せず、見事な着弾と破壊、殺傷があったまでだ。

「誤爆」とは結局、初めから現実性を失った「作為」の当事者たちが資料を照合し、「都合」と「形式」でつけた言葉にすぎないのではなかろうか。

きょうの発言／1999年5月25日

「男の自立、女の出発（たびだち）」

ある女性の別居の手伝いをした。たまたまやってきた私の車に最低限の家財道具を積め込み、新しい住居へ向かった。星明かりが夜陰にさえ、まぶしい夜だった。

「せめて話し合えるレベルに達してもらわないと困る」彼女は夫のことをそう言う。

「下手に出ると高圧的にくるし、正面からのぞむと目さえ合わせられず、逃げてばかりいる。いつまでもこちらに甘え、堂々巡りをしているという感じだ」「夫が仕事さえしていればあとはすべてが許されるという時代は終わった」

男として耳の痛い話は続いた。そうではない自分を形成してきたつもりだったが、まったく自分の中にないかと問えば否定できなかったからだ。

コミュニケーション力とは「社会的」なものと「個的」なものでは別物であると最近よく思う。

人の会話の多くは「制度」からはみ出さないよう細心の注意が払われ、どこかでコントロールされている。かつては家庭もそれで通じていたのだろうが、妻や子が〝人間〟として見られることを要求しだし、ナマの声、個としての言葉や会話を求めだした。もちろん場合によっては夫が求めているケースもあるだろう。しかし現在のシステムはおおよそ男がつくったものであり、自らが拵（こしら）えた居心地の良い形態をそうやすやすと崩すとは思われない。

男が女性を「性」や「妻」の「役割」の対象のみで見なくなったらどうなるか。逆にそこに依存して生きてきた女性の一部は危機を迎えるだろう。

互いに「人間」に近づくことは制度上の希薄な関係から脱皮し、「個」としての深い場所から自立した力をつけていくことが必要とされる。おそらくそこから信頼や愛を日々積み重ねていく作業は始まるのだ。

人間はそろそろ「利害」での関係から決別し、制度を超えた現実から出発するときが来ているように思う。

きょうの発言／1999年6月1日

ゆるやかな「枠」の解体から

私たちは多くの約束や枠の中で生きているが、その一つが「結婚」と「家族」である。その形成への思いは若い層から徐々に変化を見せ始めている。

シングルのまま、もしくは結婚しなくとも子どもだけが欲しいという人は様々な統計で増え、現在の「制度」としての「夫婦」と「家族」にどこかで息苦しさを感じている人は多い。となれば早急に関連する法律そのものを見直していかなければならないが、〝夫婦別姓〟という選択の幅も広がらない現実の中で先の道筋は見えてこない。

ノルウェーではペアが同じ住居で暮らしていれば、お互いに籍を入れなくとも入れたのと同等の権利を受けることができるという。籍（制度）を超える社会認知があり、形式より現実が重要であることを当然のこととして知っているのだ。

ところで多くの人は、今現在見えるところしか生きる場所はないと思っているが、実は目の前の暗闇（やみ）はめくれば開く暗幕になっており、そこを通り越せばちゃんと次の空間は待っている。ただその場に目が慣れるまで、多少の時間と忍耐が必要なためいらだち、なかなかそこを手に入れられず後戻りする人もいて、地団太（じだんだ）踏む結果が控えているだけだ。

旧（ふる）い場から新しい場へ向かうとはそんなふうにできており、今いる場を守り、そこでしか生きられないと思わせているのも、やはり制度と意識によるものである。

国家や地方自治も制度の一つと考えられるが、もしそれに課せられる最大の役目があるとすれば、枠そのものをゆるやかに解き、市民による決定事項を増やしながらガラス張りを実行していくことだと思う。

それにより国民は「個」として成長し自治は発達していく。夫婦はともに「人間」として「自立」を始め、「家庭」に依存していた社会は変革を余儀なくされるだろう。

きょうの発言／1999年6月8日

「言葉の壁」を超えて

アフリカン・ビートに満ちた太鼓演奏の後、ゼネラルユニオン委員長シンシア・ワージントンさんは挨拶の途中で一瞬、言葉をつまらせた。

熊本市隣保館大ホールを埋めた百人を超す多くの支援者を前に、何か胸に去来するものがあったのかもしれない。

集まったのは外国人教員を守る会メンバーを始め、学生、障がい者、同じ立場である県内の外国人教師たち、そして各地で解放運動に取り組んでいる被差別部落の人たちだった。報告会を兼ねたパーティーはなお続く厳しい現状を訴えながらも、終始和やかな雰囲気に包まれていた。そんな中かかわって一年半になる私が驚いたのはそこに若い人たちの数が増したことだ。

思えば、昨年六月のストは厳しいものがあった。ねばりつく暑さの中ファレル、ミッチェル、シンシアさん三人が表フロアで言葉を重ねていく。数十人の支援者と遠くから取り巻くように眺める学生の姿が印象的だった。

その日の、あるテレビ放送では学生たちのインタビューが流れ、「自分でわかっていて契約したのだから仕方ない」と『言葉の壁』という差別の実態が伝わっておらず、争点が彼らの意識へ浸透していない現実が突きつけられる思いがした。

それからちょうど十カ月後、その不安はかなりの面で払拭（ふっしょく）された。学生、特に目立ったのは女性の多さだ。帰りにしばらく立ち話をした。

大学を休学してのタイへの児童虐待の調査、イギリス留学、CAPや守る会の中心メンバーとしての運動、障がい者のガイドヘルパーまたは福祉施設での勤務…。

彼女らはそれぞれに生きる場の中で社会の矛盾にNOと言い、自らの生き方を模索している。枠にとらわれることを拒否し、人間らしく生きることを求めていたのだ。

新しいうねりは、今熊本に起こりつつある。そう素直に実感できたひとときだった。

きょうの発言／1999年6月15日

人はさまざまな絶望を抱え、一日一日をどうにかしのぎ、無為の中で過ごしている。

生きるとは何か。意味はあるのか。死とは、家族とは。私自身、そんな問いが中学のころ、はっきりと疑問の形となって頭から離れなくなった。

三年のとき、放課後残っておくように担任に告げられた。その日とったアンケートに「自殺したいと思ったことがある」に○をつけたのがクラスで私だけだったからだ。担任は真剣だった。あらいざらいさまざまな不安や鬱屈した思いをぶちまけた。その教師からは体罰も受けたことがあり好きではなかったが、目も離さず聞いてくれた表情は今も忘れない。帰りの道や情景がいつもとは違い親しく思え、心に張りつめていた何かがゆるんだような気がした。

あれから二十五年、先月、教え子から電話があった。現在は関西の大学に行っているという。これまで五回遺書を書き、四回自殺をこころみ未遂に終わったそうだ。

「最初に書いたのはいつ？」

「五年生です」。私が彼を受け持っていたときだ。私は心がふるえた。自らの無知と無力さにである。

「なぜ死にたかったの？」

「たとえば仲間と酒を飲み、いつのまにか寝静まるでしょう。自分だけ酔えず暗やみを見つめ続けていると不安が押し寄せてきてどうしようもないんです」

そのことをある友人に相談したそうだ。「生まれたことはよかったと思っている」そんな相手のあっけらかんとした返答に「まずそこが違うんですよね」平然と言った。

「ぼくは自分が生まれたことをプラスに受けとめられない。マイナスなんです。やっぱりこいつとも合わないなって感じでした」深い裂け目がそこにはあった。

若者の闇と光

だが彼は少なくとも自分なりに向き合おうとしている。逃げてはいない。生きる可能性は必ずある。そんな予感がした。若者の虚無は想像以上に深い。

きょうの発言／1999年6月22日

夢屋の達人たち

パンづくりを始めて三年になる。イギリスパン（食パン）など十種類のパンをつくっている。あんパンにつめるあんは、毎朝北海道産の大納言（小豆）を練る。機械もオーブンからこね機まで家庭用のものをいくつか並べているだけ。大型のものをただ置いても、使いこなさなければ意味がない。

夢屋では障がい者がとどく範囲の作業で充実し楽しくやることをモットーにしているのだ。しかし味にはこだわっているし材料もけちらない。あくまでも食品として互角に堂々と勝負したい。

営業と配達は、遠方を除いて障がい者自らが自転車や徒歩でどんどん地域を回っていき、昼食は必ずみんなでつくり、顔を合わせて食べる。ともにいて生活する時間を何よりも大切にしているのだ。

長く一人暮らしをしている人も一日に何時間か気のおけない仲間といることでどうにか踏ん張っていける、そう考えているわけだ。収入は光熱費と食事代でほとんどきえてしまう。

今の五人の利用者は募集したわけではなく、勝手に夢屋が気に入って集まって来たのである。だから自分ができる作業を見つけては好きにやっている。ただしそれには時間がかかった。私たちスタッフと本人たちが少しずつ時間をともに過ごしながら、彼らは彼らで成長してきたのである。

夢屋に「指導」や「療育」という言葉はなく「ともに生きる」ことがあるだけだ。互いにそれぞれの存在によって励まし励まされている。理屈ではなく、接してみえてくるものの中にしか真実はないのかもしれない。

最後に夢屋では、健常者より障がい者が活気があることをつけたしておきたい。なかなかにしたたかで、かつ、しなやかに生きている〝人生の達人〟たちがそろっているのだ。やりこまされている毎日である。

阿蘇に来たら一度遊びに来てください。

きょうの発言／1999年6月29日

生きていく者たちへ

生と死はともにあり、行き辿りついた所が生きた場所でもあると最近よく思う。私には九つの娘と七つの息子がいて、現在別居して暮らしている。今二人に何を残すかと聞かれれば、一言では答えられない。ただ私のこれまで公に発表された小説や文章を読み、そこから考えていた思想と生きてきた道筋は読み取ってほしいと、これまた勝手な希望を持っている。おそらくその文面を通じ、日常で見てきた教師を辞めた姿や夢屋の活動も自分たちなりにつなぎあわせ、今後生きていく材料にしてくれるだろうと思うからだ。

私の母は潰瘍性大腸炎という難病と闘っている。私が教師を辞めたとき彼女は病院のベッドでようやく峠を越した直後だった。

「こんなことなら、死んでおけばよかった」。母は人目も気にせず号泣した。

だが夢屋の活動が少しずつ認められだし、母もようやく瞳に力が生まれだした。両親をはじめ私がかかわってきた人すべてがそうだと思う。心から感謝している。私一人でできたものではなく、周りの人々に力を与えられやってきただけだ。もちろんこの拙文を読んでいただいた新聞読者の力にもよる。私はいつも紙面を広げるその時々の表情を想像し刺激と励ましを受けつつ書いてきた。文章とはしょせん、書き手と読み手との信頼関係から成り立っているのである。

今から七年前、一人のロック歌手が死んだ。名前は尾崎豊。二十六歳で逝った彼の残した詩を最後に、このコラムのしめくくりとしたい。ご愛読ほんとうにありがとうございました。

だれも手をさしのべず
何かにおびえるなら
自由　平和　そして愛を
何で示すのか
だから一晩中
絶望とたたかった
ぼくはただ　清らかな
愛を信じてる

『太陽の破片』より

地方の小さな作業所から発信するということ

土田隆氏（現在、熊本日日新聞社文化生活部デスク）より、書評を書いてみませんかというお誘いを受けたときの喜びは今も忘れません。一九九八年に県民文芸賞入選の際、取材していただいたことがきっかけだったと記憶しています。同時に「熊日」という県内で断トツのシェアと影響力を持つ紙上に拙文を載せさせていただく事にプレッシャーも感じていました。

書評欄には、毎回、十組ほどの名だたる学者や作家、著名人らの記した評が載りますが、読み比べもされる厳しい場と思っています。安易な文章を載せ質を落とし、推薦していただいた土田氏の期待を裏切りはしないか、とどのつまり熊日が日々築き上げてきた多くの読者の皆さんのニーズに応え得る文章が書けるのか、自分自身その葛藤の中、何とかそうならぬよう心がけ書きすすめて来たのがこの六十編と言えるかもしれません。

それでも今、あらためて読み返してみて、特に前半は、折角の機会だからこの作家は紹介してみたい、という思いが強く（その時点ではまさか十年続けられるとは思っていませんでしたので）、自分の興味ある著者や作品を優先的に選んでいた節がなきにしもあらずです。しかし、徐々にジャンルは小説から、ときおり児童文学を挟みつつも大方は評論、ノンフィクションへと移行し、自分と時代との著作物を通した関係の微妙な変化も垣間見れます。

そんな中、大事にしてきたのは、阿蘇の小さな障がい者の作業所の日々の営みから感じ、見えてきた風景でした。直接、障がい者と結びつく作品でなくとも、その感覚だけは自分の中の振り子の起点とし、書く上での柱としてきたように思えます。それは、地方を砦として長きにわたり全国紙と向かい合ってきた熊日同様、そこで「言葉」を発信させていただく以上は、「地方―中央」という単純な図式の下、ややもすると経済軸のみで下位に置かれがちな「地方」とその「文化」を、微力ながら押し上げていきたいという思いがあったから

です。その意味で、読者の側に立ちつつも、一風変わった書評家だったかもしれません。

現在、巷ではインターネット上に言葉は満ち溢れ、書評も例外ではありません。そういった現状を踏まえつつも『游人たちの歌』に続き、今号のブックレット出版を試みた根底には、限定された場所、限定された手段を通して「地域」から「地域」へ発信しつづける行為を大切にしたかったからです。垂直統合（ある一点から発信が行われ、地域や個人はその受け手に回るため、本質的な責任は負わなくてすむ）から水平分散型（地域や個人が自立し自発性を持っており、独自の発信を行う半面、責任も負担する）へ、今、エネルギー業界を始め、様々な分野が大きな分岐点に差し掛かっており、特にネット社会はそれに先駆け舵を切った感があります。しかし、その本質は「活字」か「電子文字」かではなく、あくまで送り手と受け手の在り方であり、情報の「質」そのものだと思っています。

いずれネット世界も、これまでのメディアが通過してきた道程と同じく試金石がくるはずです。そのとき、旧態然とした、本来の役割を見失った利権がらみの体質に陥れば衰退も早晩でしょう。

自分たちの情報網、食、労働（生活基盤）、福祉、そして文化は自分たちで試行錯誤しながらもつくっていく（再生する）しかない。地域に生きる一員としてのこの試みが、いつしか手にとっていただいた方たちと連なりながら阿蘇の夜空に輝く満天の星の群れとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回は、書評とともに一九九九年四月より十二回にわたり夕刊に掲載していただいた【きょうの発言】も加えさせていただくことができました。これはひとえに『かもめ印刷』の皆様のご理解、ご協力に寄るところであります。また表紙には、世界的版画家である浜田知明氏より、作品の掲載の快諾をいただきました。一度、展示会の評を書かせていただいた御縁をダシに不遜にも図々しい申し出をした私に、健康まで気遣って下さる温かいお返事をいただきました。さらに帯文は、熊日新聞記者、三國隆昌氏から貴重なお言葉を頂戴しました。三國氏は当時、文化生活部時代、私にとり最初で一番長く担当していただいた方で、常に的確なアドバイスを下さいました。その他、担当して下さった記者の皆様も含め、支えていただいた読者の方たちに、心より感謝申し上げる次第です。

【著者略歴】宮 本 誠 一（みやもと・せいいち）

地域活動支援センター「夢屋」代表。
1961年熊本県荒尾市生まれ。北九州大学文学部卒業後、学習塾、大検専門予備校職員などを経て、熊本県小学校教諭に採用。二校目の赴任地（阿蘇市立宮地小）での自閉症の青年との出会いをきっかけに33歳で退職。小規模作業所「夢屋」を開所。その後、自立支援法施行に伴い、「ＮＰＯ夢屋プラネットワークス」を設立。地域活動支援センター（Ⅲ型）として、阿蘇市から委託を受けながら現在に至る。
運営の傍ら、小説、ノンフィクション、児童文学、書評などを発表。『真夜中の列車』（1998）『水色の川』（1999）『涅槃岳』（2008）『游人たちの歌』（2009）で部落解放文学賞入選。『ウォール（壁）』（1998）で第20回熊本県民文芸賞、『お月さまとゆず』（2004）で家の光童話賞優秀賞、作品集として『トライトーン』（2006）を刊行。今回のブックレットは『游人たちの歌～ある自閉症の青年らと生きて～』（2010年刊行）につづき２号目となる。

【版画】浜 田 知 明（はまだ・ちめい）

1917年、熊本県御船町生まれ。東京美術学校（現、東京芸術大）卒業と同時に日本軍に入隊。1951年、銅板画『初年兵哀歌』シリーズが高い評価を得、1956年、第４回ルガノ国際版画展（スイス）で受賞。1965年、フィレンツェ美術アカデミー版画部名誉会員、1989年、フランス政府よりフランス革命200年記念に際し、芸術文化勲章（シュヴァリエ章）を受賞するなど、国際的に活躍する熊本が世界に誇る芸術家である。

【帯文】三 國 隆 昌（みくに・たかあき）

1965年、熊本市生まれ。熊本日日新聞社記者。文化生活部、編集本部らを経て、現在大津支局長。

往生岳の麓にて
～障がい者作業所から見た本と時代の風景～

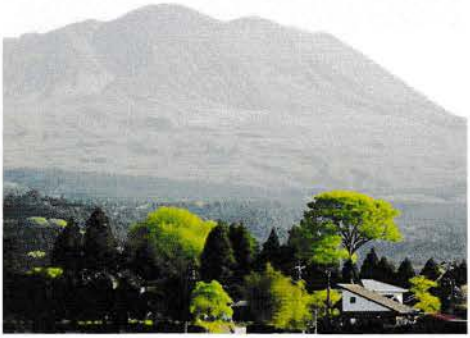
平成二十三年六月二十日　発行

発行　ＮＰＯ夢屋プラネットワークス
代表　宮本誠一
〒八六九―二二二四　熊本県阿蘇市蔵原六二六
ＴＥＬ・ＦＡＸ〇九六七―三四―〇二二三
E-mail aso.yumeya@lemon.plala.or.jp
http://www.asoyumeya.org/

著者　宮　本　誠　一

印刷　㈱かもめ印刷

定価　八〇〇円（税込）



往生岳の麓にて

～障がい者作業所から見た本と時代の風景～

定価：800円（税込）